

十一月興行

文楽座 人形浄瑠璃

伊

賀

越

双

中道

六



一部金十五銭

文楽座

堂々の總出演

本 格 興 行

「通し狂言」に壯觀を極む

菊花霜に映れて、秋の氣色一段さ高き
がうちに、皆様の御健康益々御熾んなこ
さをお欣び申上げます。さて、十一月は
今より二百九十八年前伊賀舞屋の辻に於
て史實に輝く『伊賀の仇討』のありし月
にて、また、これを淨瑠璃に脚色したる巨
匠近松半二の恰も百五十年忌にも當りま
すので、茲に文樂座人形淨瑠璃の秋の本
格興行として三巨頭はじめ一座總出演の
大活躍で御座います。巨豪より新進にい
たるまで華々しき活躍を見る「通し狂言」
を上場いたし至藝名技に御厚情切なるみ
なさまへ綺羅萬幅の大饗宴を展くもので
御座います。まづ清澄のひさここの溢
る、興趣に陶酔下さいませやうに。

昭和六年十一月

四 ツ 橋

文 樂 座

昭和六年十一月一日初日

初日二時開幕
毎日三時開幕

・御 觀 覽 料・

- 一等椅子席 御一名——金三 圓
- 二等 席 御一名——金一圓五十錢
- 三等 席 御一名——金八 十錢
- 一等お座席 御一名——金三圓五十錢

一等お座席 は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一 一番
 専用電話 七四〇八番
 電話 南 三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履
はそのまゝ御入場出来ますからなるべく
靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へツカト廣告御掲載希望の方には文樂座編輯部へ希すま

あ ら ゆ り 印 刷

永 井 日 英 堂 印 刷 所

大阪市西區土堀通一丁目
 長三〇八番
 四九四番
 四九四番
 土堀(44) 佐土



十一月興行豫定時間表

通し狂言

前

伊賀越道中双六

郡山八幡宮の段 (三時より三時廿五分まで)

政右衛門屋敷の段 (三時三十分より四時四十五分まで)

大廣間の段 (四時五十分より五時二十分まで)

幕間 十五分間

沼津里の段 (五時三十五分より六時五十分まで)

幕間 十五分間

新關の段 (七時〇五分より七時四十五分まで)

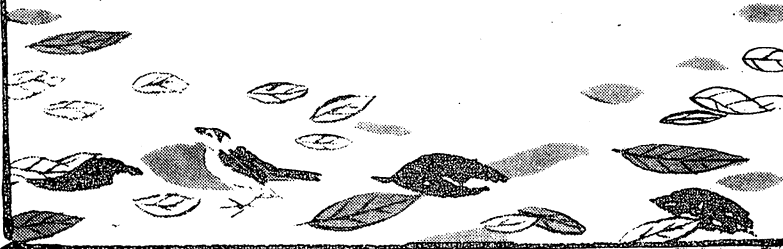
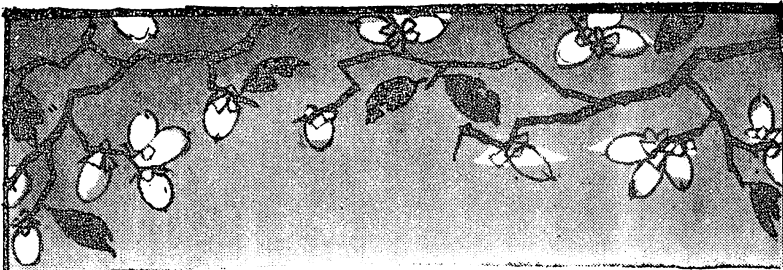
竹藪の段 (七時四十五分より七時五十分まで)

岡崎の段 (七時五十分より九時五十五分まで)

幕間 十分間

切川連理柵

道行の段 (十時五分より十時三十五分まで)





人形芝居について

◆人形芝居發達の事

◆文樂座なり立の事

◆人形頭説明の事

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたさ御座います。其當時に、四三三云ふの傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、さ云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いて居たらしく御座いますが、淨土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃さいふものも出來た、即ち京都の目貫屋さ云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形さ此三者が綜合される事に成りました

たのむ、慶長年中、即ち徳川の始
頃ですが、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫓が立つて此人形芝居が繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのですが、然し舞臺などは固よ
り無く其人形さて首があるばかり、
遣ひ手の手も人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛彈掾が始めて其手足の工夫も
したものですさか。由來此掾號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから
くり人形が出来たり、野呂松のの

ろま人形が出来たり、次郎三郎の
おやま人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるまで大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸し、しかも其人形遣ひとして
は辰松八郎兵衛さ云ふ名人が出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたさ云ふのが、始めは此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
之が見好くないから黒幕の蔭に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袷を着け手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る
事がないといふ評判を取つたので
あります。加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかな盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら、
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてから先づ眼が動き、指先
が動き、享保の末には竹本座「大内
鑑」の與勘平彌勘平も腹をふくらま
し、元文になるまで豊竹座「武烈天皇

儀』の佐手彦の眉を動かさしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の遣ひに片手の暗業を示して以來さいふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裳を着せる所か、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒襦子の前帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代さいふものは操盛人を極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立

して其眞實は凄まじい有様であつた云ひます。江戸まで矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞し此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍と成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になるに漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大阪の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたを見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に權を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以来發展を來たしてゐましたが、大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四ッ橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうか。考へます次第で御座ります。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出来、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)云ふのは、竹本座

の「用明天皇職人鑑」の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので、其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば「寺子屋」の源藏、「妻八」の八郎兵衛、或は「千本櫻」の銀平、「陣屋」の盛綱のこき、なほ之の眼り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之です。然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素齋鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事がある云ひます。兎もあれ昔相座や「薄雪」の兵衛、あるひは「紙治」の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた「日本振

袖始」から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太も呼んでゐるが聞きますが持役として「朝顔日記」の駒澤に「太十」の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめる「阿古屋」の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをする云ひます。又所謂おやまの中にはおむす云つて之は勿論娘の事で「野崎」のお染「壺坂」のお里「妹脊山」のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城とあるのも多分之二と同じものか。考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



郡山八幡宮の段

「通し狂言」
前 伊賀越道中 双六

豊竹和泉太夫
竹本長尾太夫
竹本貴鳳太夫
竹本文太夫
竹本さの太夫
竹本津磨太夫

豊田大内記
吉田玉 松
宇佐見五右衛門
桐竹門 造
櫻田林左衛門
吉田玉 幸
谷 吉田文五郎

人形

野澤友歌之助
鶴澤友歌之助

郡山八幡宮の段
政右衛門屋敷の段
大廣間の段
沼津里の段
新關の段
竹崎の段
岡崎の段

この淨瑠璃は近松半二の作で、天明三年四月二十七日初日の竹本座に初演されてゐます。半二はこの上演に先だつ同年二月四日に歿してゐますから、この作が絶筆になつてゐます。澤井股五郎は渡邊軻負を殺害して、其所持の一刀を奪つて東海道筋を下て

逐電した。郡山の唐木政右衛門はこの飛報に義弟のために舅の仇を討つ助太刀をすべく決心し女房お谷を離別したいけな七歳のお後を後連に迎へるさいつた反問苦肉の術策まで催し、藩公豊田大内記へ暇を取るべく暗れの試合まで、わざと負けを取つて暇の出るやうに念じたが却てその腕前膽力に藩公の重用を促し、眞銀白刃の寸前に眞影の極意を傳授し殿の允許を得て目出度く仇討助太刀に出向く。軻負の一子志津馬は政右衛門の助太刀を得て仇澤井股五郎の行方を探しまはつてゐた。吉原で敵を尋ねまはつた志津馬は瀬川と馴染を重ねた、その瀬川のお米は沼津在の平作の娘であつた。志津馬の破傷風を癒さんためにお米は日夜心を痛

めてゐた。圖らず平作がつれて戻つた旅の客重兵衛は實は平作の實の子でお米の兄にあたり幼い時に子にやられたもので今は股五郎方のものであつた、印籠からそれと知つたが親子の名乗もあへず苦しい別れをして立ち行くが、後追かけた平作が股五郎の消息をきかせてくれさ實の親父が今世の頼みに、腹を切つて、今落ち行く平作に引導替りに股五郎の落ち行く先を知らせる。平作の息は絶へたが數かけにはお米が孫八と共に聞

ゐてゐた。政右衛門は箱根の關所を越える切手も無いので飛脚助平も遠眼鏡に見惚れてゐる隙にその切手で通り抜けた爲に岡崎で捕手に圍まれた。その危急を助けて呉れたのは眞影流の達人で政右衛門の舊師の幸兵衛であつた。政右衛門の女房お谷は乞食姿になり果て、はるく夫の行方を尋ねて来たが義には代えられぬとすげなく追返す。義も人情の欄に勇士烈婦の心境を描いた名作。

(床本) 郡山八幡宮の段

威光輝く大内記殿奉納首尾よく納りて早御下向の先ばらひお徒御近習前後を配り鳥居前まで出賜へば御供には宇佐美五右衛門中扨從に召連れ御前間近引そへば後押へは櫻田林左衛門指南の棒を振廻し鼻高々さ御供す、暫く是にて御眺め近習の武士御腰かけを奉れば櫻田は進み寄りイヤモ今日のお能數多有る其中で別して殿様の猩々恐れながら驚き入奉る、我君へ御傳授で候のさ師範

風ふかす源之進なごイヤモ中々及ばぬ御足取りいつくよりも出来させ賜ひ神も納受まします、何と各々左様では御座らぬか、へつらひかざる林左衛門、大内記殿打笑みたまひいばれなき藝道なれども好むにいついては功者も出来んさりながら何事も導引なくては其本意を失ふ道理、取分け今日の奉納も我一人の力にあらず、一家中の者迄も満足せれば、奉納さば言ひがたし、殊に天氣も宜しければ我喜び限りなし。太儀くさ有ければ皆一統に頭をさげハツトばかりに平伏す、五右衛門御前に手をつかへ誠に殿様の御意の通り今日は一しほ天氣宜敷御祈願の奉納一家中の者は申上るに及ばず我々迄も恐悦至極に存じ奉る恐れながら、五

右衛門もお願ひの筋あり、先達て御取次仕る唐木政右衛門儀、劔術をまゐりて御家へ御奉公に出し候所、名のみばかりにて其器量あるなきを御上覽に入れ奉らず何卒、林左衛門殿さ、立合の儀御高覽遊され候様、御願ひ迄奉るご聞もあへず林左衛門、アーコレ〜宇佐美殿御上へ對し恐れ多い願ひ、尤、政右衛門殿さやら、貴殿の御世話によつて、劔術を申し立御奉公に出られた人武士は相互成程お望みならば相人に成て進ぜうか、そりやもふ蟻螂の斧さやら申事さ、いらぬ事じや〜よしに仕めされお氣にばさへられな、此林左衛門相人には餘りおこなげなく何のそれが一溜りもあるものか、殿にもおかしく思召、ハ、ハ、

いゝごあざ笑ふ、林左衛門には見向もせず政右衛門儀不鍛練なる者杯ご影口を申も者も候よし左様なるものご口を給はり候ては取次仕るこの五右衛門、一家中へ相濟申さず是によつて、政右衛門に立合の儀御願ひ申上候様さ申聞せ共彼も新参者の儀故辭退仕る、何卒此儀御上より仰付られ下さらば拙者も面目此上なしご餘儀なき願ひに内記殿、武の道は尤なれ共我家に生れながら劔術のことはこんご氣が乗らぬじや、政右衛門事は家老共がきつい取持、兩人の立合ごちらか劔術善惡にもせよ某が構はぬ事、家老共が得心せば身が事は何時でも見物せん今日の奉納もごかく家老共不得心、そちは又東明より出て忠勤つくす、

其替り、餘り好め事なむら始めての願ひ、聞届けんも道ならず、政右衛門事は辭退致すさな、兩人の事は用人方へ言つて、くれう、其代り近日若宮の八幡宮へ春日就神奉納仕たい又家老共が何さいはふご其方が計らひせよ、ヤモさかく遊藝が樂しみか深い、願ひの通り、聞届けた、ご御上意の詞にハツト宇佐美が面目忝涙にひれ伏ば大内記殿仰には奉納の場所へ諸人の入込しんばいの恐れもあれば其方は後に残り御神樂をへ社内立の清め仕れご言捨御座を立賜へば横にはびこる櫻田が御後に引添ばさゝめき渡る御供先駒の嘶き響の音、本城さして歸らる、御跡見送り五右衛門は一人言ハア遠大家の殿様是程にお好なさるゝお能にかへ、

林左衛門と政右衛門立合の勝負御願
ひ申たれば早速に御聞届下さるゝも
日頃の願ひ本望と社内をさして行折
から、申し／＼と松影より呼かける
は女の聲、何者なるご見合す顔、ヤ
アお谷殿ではないか面体あれし人相
氣遣はしやと尋ねればお谷は源押拭
ひ包むとすれど女の事、有様にお咄
し申さん、國元から歸りてより政右
衛門殿の心底替り出るにも入るにも
不機嫌、此刀を差出し是を持って五右
衛門方へ行と言ふたばかりに物をも
言はず、ごふ言譯やら合點行す問返
されぬ日頃の氣質お前に逢ふて様子
も言はふご其儘立て來りしが通りが
つてお前を見うけ殿様のお立をば
忍んで今迄相待しと刀取出し差うつ
むき、暫く詞もなかりけり。宇佐美

はつく／＼と打眺め、ハテ心得ぬチ、
それよく／＼コリヤコレ、我秘藏せし
長船の一腰、其方が親代りご成たる
印しに遣はせしに、持せ越たは合點
行すご引拔見れば物打に巻添し一通
コハ／＼いかにご解ほごき、見るよ
り惻りム／＼コリヤごなたへ暇の一札
様子ご有ふ語られよと詞にお谷は涙
聲、何私への去り状ごや、去るゝ覺
微塵もなしエ、聞へぬぞや政右衛門
殿料もない身をむごたらしう去るご
いふごこ誰が始めた、お腹に十月只
もない身を、情なごさかつげご伏て
泣居たる五右衛門せき立エ、ごなた
も武士の娘ではないか魂の腐つた政
右衛門後を慕ふ事はない、エ、口惜
い我眼の見へぬご誤り、遮器量のお
る奴何ぞぞ出世をさせんご思ひ今出

頭顔する林左衛門と一勝負立合せ
武藝の器量を現はし一家中の手本に
せん、さすれば、殿にも遊藝の事お
捨なされ武道の道にお心を寄賜はじ
お家のお爲ご思ひし故林左衛門と立
合を勤むれ共辭退するは憶病風に引
された大腰拔めが、此儘に相止め
なりし時は一家中の物笑ひ願ひを上
し御前の手前も言譯なし、エ、不甲
斐なご計にてごふご座を組居たり
ける、お谷も俱に泣くごき夫の心の
直る様卑怯者ご言はれぬ様思案して
たべ五右衛門と取付歎げばチ、そふ
思ふも尤最前も殿の御前で林左衛
門めご我に向ひ、彼等を相人に立合
はおごなげなしご人もなげなる雑言
過言、聞ぬ顔は何故ぞ、お家のお爲
二つには儼を出世させんものご思ひ

唐木政右衛門屋敷の段

中 (豊竹千駒太夫
竹本播路太夫)

(鶴澤友二作
鶴澤重造)

次 豊竹駒太夫

鶴澤重造

切 竹本土佐太夫

野澤吉兵衛

人形

唐木政右衛門	吉田榮三
女房お谷	吉田文五郎
宇佐見五右衛門	桐竹門造
石留武助	吉田光之助
母柴垣	桐竹政龜
嫁おのち	吉田榮之助
乳母お倉	吉田玉七

し事も恩を仇、但し國元の騒動を聞
一家の縁を切所存は儕故には勘當受
し此お谷某も親ご成女房に持せしに
科なき者に疵を付、追出しておこす
のみか、親代りにやつたる此刀の物
打に眼の状を巻付しは我を欺く憎い
やつ、心魂にこたへ〜こたへ
て了簡ならず年寄たれ共此宇佐美尖
き及金の切味見せんこ一圖に擬たる
國侍、お谷は取付マア〜お待なさ
れて下されませこ絶るを振ひヤア愚
か〜一先こなたは屋敷へ歸り何氣
もなくもてなされよ、我も後より押
かけて、ここに寄らば先手を取て切
かけん其時こなたもナ、サ此刀で尋
常に自害せられよ、未練に心残され
なこ詞立派に言放す夫の心のぜんあ

くを小づまり、しく帯引しめ勇まぬ
心取直しいさみ勇むや論神樂打連て
こそ立歸る。

(床本) 政右衛門屋敷の段(中)

昔は山の後なれや今も名のみは郡山
家中屋敷もつくるはず直な唐木の武
目有る家の柱は退去りに奥櫓役の留
守預り石留武助は忠義者、常の奉公
裏表、内證期ひいそがしき臺所より
腰元共ばら〜こ立出、コレ武助殿
今夜は内方へ嫁御様が見へるげなお
目出度い祝言振舞わたしらもあやか
る様にお手傳ひに参りました。イヤ
御苦勞〜小身の旦那政右衛門様仲
間一人下女一人若黨の此武助が料理
人やら家老やら人手がなさに御家中

の女中方を御無心、侍女郎にも酌人にも各様頼みますイエ、同じお給仕でも祝言を聞けば気がしよぎ、したが合點の行ぬ事はお谷様さいふ奥様お里歸りなされてから聞けば去られなさつたげな、がまだぬくもりもさめぬ中新らしい女房を入るこはモ餘りな手廻しサイノ今度の奥様はごからお出なさるのじやえい、ヤ家元もうつふつ存ぜぬ何だか知らぬが旦那が一人呑込で今夜嫁を呼程に祝言の拵へせいと言付て出られたから何ぞ俄に料理拵へ少斗り聞はつた海老の舟盛、置鯉、置鳥などいふしちむつかしい事は取置鮎の吸物腹合せは新枕の心じやげな、が肝心の鳩壺を忘れて正月のお古を紐かへ間に合せたがいかねいものは銚子かへ

の折形御存じなら折て戻いていハテ何の其様に儀式せいで大事ない仲人さへない嫁入り今迄ごぞにこつそりさ圖て有つた女中で有るホンニあの政右衛門様もお顔に似合ぬ色事仕先の奥様はお腹が立ふチ、それく、馴染の女房隙取らして後へ来る嫁づらはごんなお煩じや見てやりたいささがない女子の口々にうたて

(床本) 政右衛門屋敷の段(次)

浮名の高話し、うき事の思ひの種を身も持て我内なむら心置く夫の留主を鏡ひ足腰元目早くチ、奥様よふお出なされましたと言ふに武助も押下り幸ひ只今旦那のおるすお歸りならばお知せ申さうまづおゆるりさくあしらふ程いさゝ重なるうさつらさ諸

白髪迄言ひかはした人の心も替ればかはる我内へよふ来たさいはれるようになったわいの身に覺へはなれ共親分の五右衛門様ごのよふなあやまりしたぞ、いさまの印の此一腰わけが立たれば受取らぬさお屋敷にも置れば立よる方もない身の上、見ればいかふ賑やかながお振舞でも有のかご問はれてそれさ言ひかぬ後先見づの下女はした。今夜はお屋敷へ嫁御がお入りなされます。ヤア嫁さば誰が嫁、コレ武助よもやそふではあるまいと思へど、もし旦那殿に女房が来るのじやないかやイヤ其義はエ、武助殿、かくしてもごふで知れる事、政右衛門様のお内儀様で御座ります。下地からわけのある事かして、今夜俄の御祝言、私等も

隣り屋敷からお給仕に雇はれました
 お前様は先の奥様、てつきりとお妾
 に見かへられなされたに違ひはない
 ぐつこおりんきなされませこ、身に
 もかゝらぬ下々の法界悋氣に焚付け
 られいさゝ重なる口惜さ包かぬれば
 見て取武助エ、コレ女中方役に立た
 ぬ事言はずとお壺所に人むない、爐
 の炭もついでもらふアイ、合點じ
 やテア皆お出で旦那のお歸り待ち女
 郎こちらも嫁御の相伴でよい夢見よ
 ふこ打つて立て行く間を待兼て、
 かつげと伏して泣居たるチ、お道理
 ぢやくしたがお申し奥様必ず悋氣な
 されますなへアノいやる事はいの悋
 氣さば一通りの事、非業の死をなさ
 れたごゝ様、弟、志津馬も敵討の力
 さ頼むはたつた一人其夫政右衛門殿

縁切れたれば誰を頼みに大敵の股五
 郎いつ本望が遂げられふ、力も綱も
 切はてしと思へば胸が張り裂るさな
 げ、ば供に泣じやくりお氣づかいな
 さるくな、たごへ旦那がごぶおつし
 やつても拙者めが命にかへても此御
 縁は切らしませぬ悋氣なされなごは
 そこの事お前様のおなかに政右衛
 門様の御世繼がござりますぞへ、去
 り状取ふが後づれがは入らふが其お
 子さへ御平産なされたれば切ても切
 れぬ血筋の縁政右衛門様の奥様と言
 ふばおなかの證據のお谷様、敵討の
 助太刀も頼みの種の人參子産み月
 に氣を揉であやまち有ればごふなさ
 る、追付旦那お歸り有らば悋氣がま
 しい御顔なされずさかく此内を動か
 ぬよふになされませ御合點も参りま

したかア、こは言へ義理の有る女房
 去て嫁入の祝言のさば旦那はごふし
 たお心じや拙者もいつさい合點が行
 かぬ、ほんに此蝶花形、私は折様存
 ぜぬお前様お頼み申ますと言はれて
 手には取りなごらみす、夫を寢取
 らるゝ、あた憎らしい蝶花形、犬骨
 折つて早ぶさの鷹の餌になる春の雉
 子、そこに夫の聲聞こへあれ旦那の
 お歸りしげらく忍んで御座りませこ
 家來も情けを力草逢たい夫にかくる
 くも疵持つ心唐紙を押開け

(床本) 政右衛門邸の段 (切)

心かけ有る侍は地を這ふ虫も氣を赦
 さぬ唐木政右衛門伊達を好まぬ刀の
 柄前、人に勝れし袴の幅、上屋敷よ
 り歸り足、武助手を突きや申し御旦那

那珠のほかお躰入り御用の品はいか
体の儀でござりましたなサレバン、
此間から辭退する彼林左衛門武藝
の試み明朝正六時御前において立
合と押付て御家老の言渡しエ、今晚
妻を迎へます婚禮の中一兩日お延
し下されさ願ふてもいかな聞入す
女房呼ば私事明日は延ばされぬこ
モさりさは心ない家老殿此方は内へ
氣おせくも尻に成に漸う只今エ
祝言の拵へ用意は出来たかア、ヤ
レ、知行取にも飽果た嫁の來るま
で裸脱で休憩せふ、枕おこせ女子共
アイと返事もさし足に角を隠せし塗
枕をつまへに奥様を腰元おはりの
見へ隠れ袴は解ご胸さけぬ尖ひ常の
侍肩衣折てたくんで取直す詫の種
まは見付た夫ヤイ武助アノ女は何者

じややい。エーイ、イヤあれは彼
今日お目見へに參つた新參の女中で
ムサナ、ハイ且那樣お目かけられて
下さりませ。フウ奉公人じやな。見
かけから愚鈍そふなふつ、かな女な
れど、遣ふて見てくれふ。コリヤ
ヤイ今夜は身共が女房を呼びかへる
祝言の給仕申上げぞエ、アノ嫁御さ
お盃の其給仕をせいとはエ、そり
や餘り、イエサア餘り急な御祝言不
調法な私も給仕得せずば奉公叶はぬ
立て歸れア、イヤ申何でも御意は背
きませぬさ下女に成ても夫の内放れ
兼たる心根を察して武助が呑込涙、
チ、そふだ、奉公は辛棒が大事何
おつしやらふさナアイ、こそこら
を程よふ搦梅加減ヤドレお盃の用
意せふと料理をしほに立て行折から

宇佐美五右衛門様御出さ案内すハア
又堅ぞふがわせられた誰ぞ羽織持こ
いと言はぬ先から心得て勝手覺えし
女房の徳、氣轉きかして後から着せ
る羽織をひつしよなくエ、子供では
ないはい、差出女めあつちへ行こ、ね
め付られて是非なくも立間せはしく
入くる五右衛門、彌左衛門裁の結
こは張切てむづさ座し政右衛門殿今
晩は甘に嫁入が有さ承、はり御祝
儀申に參つた老人の寸志そご御覽下
されヤはは、婚禮を祝しての御發
句でかな、先以て忝なしご押開き
見て驚き顔フウコリや拙者への果し
状でござるなチ、サハテ存じ寄らぬ
先其意趣の次第はな、しれた事さ、
料ない女房なぜ去つたハ、い、拙
者か女房を拙者む去にお手前様も何

故の御立腹、イヤサ言まいエ〜とや、尤もお谷は上杉の家中和田行家が娘なれどお身と密通して二人連此郡山へ駈込だ流浪の体不便に思ひ且はお手前が器量を見込殿へ申て有付せればサ此五右衛門、其上勸當受けて親のないアノお谷身共が娘分にして改めてお身にくれたれば以前は行家が娘にもせよ、今は身共が娘、少々の見落し有さても去れる義理ではないぞよ、イヤサ〜一旦の恩を忘れ外の女房持かへて此五右衛門を踏付た仕方エ、堪忍ならぬが夫共お谷に據ない科でも有か、サ〜いそれ聞ふ〜返答次第座は立せぬと鏝打叩いて詰かけたリイヤもふ重々御尤千萬がお谷に微塵も科はなし去た仔細は別儀でない、ごふ致したか

飽ました。イヤモ女房と言ふものは飽てから片時も持て居られるものではござらぬサ〜、御立腹は御尤が爰をよふお聞きなされ只今拙者ご討果されては五右衛門殿へ不忠に成ませふがやサなごおつしやれ明朝御前において櫻田林左衛門と劔術の勝負を致す此政右衛門是まで拙者を推擧なされ明日も巳に以て勝負見分の役目を仰付らるゝ其元が拙者をざつぶりご切てお仕廻なされてサ殿へは何さ言譯はなさるゝぞ是非憤り晴ぬさ有ればハテ何ぞ致さふ武士の因果明日の御前を勤めて其後でお手にかかりませふ暫く宥免下されし理に詰められて、さしもの五右衛門ムヤコリヤ尤、意恨は意恨御用は御用、明日までは傍輩の役目中よし〜ス

リヤ御得心下さるかア〜忝いハ〜い〜然らば今宵は是に緩りと御酒一献お上り下され追付新しい女房が参るイヤ又其器量のよき雪ご墨ごの替徳、古女房のお谷めは不器量の上因果ご早ふ子をばらんで正眞の河豚の横飛、ハ〜ハ〜イヤモ、飽たを無理さは思し召なご愛疎盡した立聞の障子に齒形も入斗り登るつかへを折しも有れ嫁御様早是へチ〜待兼た早ふ通せ女子共〜レ燭臺に灯を燈せ鳴響銚子を騒ぐ程五右衛門がむかつき顔玄關より奥座敷直に手操の銀乗物對の簾筋に染込の覆ひも愛持介添女房チ〜太儀〜イヤナニ宇佐美公只今彼妻が参つたお祝ひ下されア〜お目出度儀でござる御推量下さりヤ貴公には御退屈コリヤ〜あな

たに御酒上いよア、イヤ拙者御酒た
べるま胸が悪くござる是は氣の毒然
らばお菓子イヤサお構ひ御無用ハテ
堅くろしい何かな御馳走コリヤヤイ
新參の女何をうるくまいく其
不調法では祝言の酌は得せまいお客
人の肝癪ソレ御脊中でも揉で上いこ
言ふ程腹の立波に音を泣千鳥四海波
扱我等今晚の花舞絃を着る筈なれ
ど天窓から打解る様に角菱やめて此
儘の見參サア、早ふ女房共の顔が
見たいチ、お心安い舞様で、嫁御様
のお仕合せ恥しむつてござらすサ
ア、お出なされませ、と乗物明れ
ば綿帽子に腰より上げ埋もれて七ツ
斗りのいご様御寮尺にも合ぬかい取
ほらく帯につられて座敷にさんご
乳母は取て、ア、申其帽子はお盃

の濟まで召してござれア、イヤ、
簪さしからふ取てやりやどれ、戀
女房の御面像さほうし取らせば尺長
もしまらぬけしの花嫁御直す三方土
器を乳母が持添戴かせ舞君様へ上ま
するア、忝い、女子共皆見てくれ
何さまアちよつこりさ何處に置ても
邪覺にならぬよい女房で有ふな、
ハ、ハ、ハ、ハア嬉しい、目出度ふ
一つ次の間より千秋萬歳の千箱の玉
ご謠聲、襜の袖に一通取乗立出るヤ
アお前は母様柴垣様さ驚くお谷に目
もやらず政右衛門に打向ひぐはんぜ
ない此娘を女房に持て下さるは此上
の本望なし舞引出の此目錄は主人上
杉宇内様より笹志津馬に下されし敵
討御免の御書が彌々助太刀なされて
下さるマお心じやないヤモお尋れに

及ばず承知致して罷り有るコリヤ新
參の女も能聞け身共には先妻が有た
れ共な親の救さぬ不義鬻通行家殿の
勘當の娘ざれ合女夫の悲しさは表立
て舞舞さいふ事はサならぬぞよ、今
郡山の扶持を戴く政右衛門がよしみ
もない他人の助太刀がサ成べきか、
コレ此おのちはな世間暗れた行家殿
の忘れ笹志津馬が、妹に違ひない此
子ご今祝言すれば是こそ誠の舞舞、
舅の敵小舅の助太刀、任るご殿へ御
願ひ申さんによも不届きさは思され
まじ、かなたこなたを思ひ斗つて科
もない女房去た謂ればサ此通り、義
理と言ふ色に迷ふて五年の馴染に見
かへた心ヤコレ、汲わけて五
右衛門殿御立腹の段々は眞平、ア
、ア我等すんど酔ました何申すや

らイヤモたわい〜こ酒に紛らす本性の言譯聞て手を合せチ〜よふ去て下さんした其誠をちつこの間も恨んだ女子のまはり氣を堪忍してエ〜マ下さんせチ〜サ身共もよい年をして疑ひの悪口ヤモ去りては面目ないハアあつげれ武士かな政右殿此祝言は敵討の門出武士道も立ち家も立つア〜よい嫁を迎へら〜た扱々目出度い婚禮我等も共々お取持さ始めの腹立打てかへ一度に顔のホ〜ア〜ホ〜ハ〜い〜色直しハアお心かなれば彌々かはらぬ政右衛門が後連のお後や二世かけてそなたの男今夜から抱いてれるぞやコレ女房共〜と言へごお後は欠び交り乳母もふいのふごやんちや聲、チ〜是は娘さした事が嫁入早々いんでたまるものかいの

三々九献まだ濟ぬ殿御の戴くものじや、イヤあからはいやじや乳母あれほしい、あれさばム、お餓かへホ〜い〜チ〜さもしい奥様では有ぞア〜イヤ〜道理じや〜可愛女房に何惜からん併し一つは過る半分は身が預る是が夫婦のかためぞ持せばほや〜餓頭えくぼホンニ忘れた嫁君の御持參の御道具と單筒の引出し廣蓋に盛ならべたる持遊びの市松人形風車七ツに成る子に殿を持せ濟したしやん〜濱松の音はざ〜んざ座はかはられど我夫を夫さいはれぬお谷が心、思ひやつて居るはいのそもじさはなさぬ中ほんの娘の此お後さ見かへさした繼母が聲殿に悪性根付たさ恨んでばしま下さんなア〜勿体ない事ばつかり私が縁の切るのはは

様へ不孝の言譯政右衛門殿いつ迄もあの子と添て下さるが家の爲志津馬が爲、わしや死るまで去られて居るが嬉しいはいのさ明し合親子の真心三國一思ひは富士の郡山解て涙を汲かはす酒も裏に入しめん〜今夜も更渡れば稚子も乳母すう寢よふさちいさかすチ〜此お子わいの七つになるまで乳たべる子も有ものかソレ殿御の手前もお恥なされア〜イヤ大事ない〜是から新枕、腰元共床を取身も追付寢るコレ乳母ソレ女房共にし〜やつて寢さしてやりやさいナはり心付くに乳母のお倉が抱か〜へ寢所に伴ひ入れれば政右衛門宇佐美が前に手を突改めて五右衛門殿へお願申上度仔細有りサア〜役に立すさ身共も力に成たい何なりとも

遠慮なふ承はらふサゝごふかエハ
ハア御深切 忝し近頃申兼たれ
共其元様には明日御前にて切腹なさ
れて下されいムサ其仔細さいへば明
六ツ時櫻田林左衛門と立合仰せ渡さ
れし此勝負に拙者負まするトハまた
なぜなサレバサ高の知れた林左衛門
打すへるは合點なれど勝ば御前の御
意に叶ひお暇む出ぬ時は助太刀の望
叶はず御前に置いて此政右衛門もの
見事に打負けそれを落度知行差上
浪人して思ふまゝ小舅の助太刀致す
所存、時には拙者が劔術を吹聴なさ
れた其元様負た我らが恥よりも見損
ふた御恥辱よもや生てはござるまい
腹なされにや成まい、是迄厚ふ御最
負下されさま、御恩に預かりし恩
を仇と申さふか腹切て下されと申出

すは五臓の血を一時に吐よりも苦し
けれ共舅の敵む討たさ志津馬に本望
遂さしたい斗りにか様の不届を申上
る御赦なされて下されし鬼を欺く政
右衛門わつミ泣たる眞實に感じ入て
ム、尤も命進上申すイヤモ何よ
りも安い事が只残念なは林左衛門め
に恥面か、せんと思ひしに返つて此
五右衛門面目を失ふて相果るは悔し
けれど貴殿が本望こげたれば其時す
ぐ暫しの無念誠有る侍の爲に鐵
腹一つが役に立たば身に取て大慶ハ
イヤ、と死るを常の武士氣質
アレ聞たか主人に預るお命を我々に
下さるゝソレ有難いとお禮申せ女房
どもとこは言はれぬ表、親子共又言は
ぬ孝行勝べき勝負を負るも義心、
恥辱を取て御最期も侍、同士の情

けこ互に禮儀の中々に涙催す八つ
の袖、時計の七ツせはしなくアレ早
勝負の刻限近し身は先へ登城致す用
意有政右衛門貴殿のお暇出るを相圖
に身共切腹御邊は直さま鎌倉出立
冥途の出立早參る、ハイハイ、
御苦勞後刻式禮黙禮性急武士の短
夜や明る間を待つ最期の門出、いさ
んで御前へ……

(床本) 大 廣 間 の 段

時過て早明六つのしらせの太鼓朝日
か、やく大廣間大内記殿上段の褥に
着座成ければ近習の武士各御前に
並び居る、政右衛門は大のしなへ櫻
田は兼てより好む所のさぶり流長柄
を持って待かくる、双方呼吸の透間な
く先を取らんさいごみ合切先及金は

辱をあたゆるは武士の情にあらすこ
態を勝を譲りしは劔術斗りか心まで
奥床し頼もし、政右衛門を取持した
五右衛門身が爲には天晴忠臣誤りこ
思ふべからず又林左衛門事は怪我の
勝をそれとも知らずいかめしく罵る
は我藝の我でに見へぬ不鍛練千萬知
行くけるは國の費へ暇をつかはす勝
手に屋敷を立退べしと案の外成る御
上意に林左衛門一句も上らず尖き殿
の御賢慮に恐入たる一家中御前に叶
はぬ林左衛門何をうちく仕召るサ
一早立召れさせり立たられしたゝかな
めに大廣間強將の元に弱卒なしと馬
鹿の家来にや馬鹿かなるわい身構へ
太刀揃エ馬鹿くしいア、此様な
主人を持って居ちや生涯頭のあがるた
めしはないドリヤ歸つてくりよヤイ

政右衛門うぬよつほど仕合せなやつ
だぞよごごで急度此返報するウマ
待ておるム、一人すごく立て行く
重れて政右衛門に言ふべきは新參な
がら其方武藝の鍛練感じ入る。二百
石加増申付る。黒書院にて 改 孟
今より一家中の師範を成り彌々忠義
を勵んでくれよさいと懇ろに仰有し
づく御座を御太刀持小姓引連入賜
へばぐはらりと違ふ胸算用二人は顔
を見合す斗り只うつさりと手を組ん
で政右衛門殿五右衛門殿ハッハ、是で
はお暇は願はれまいサア身共も折角
切かけた腹がひれに成たコリヤマア
ごふこ腰も抜け一度に溜息次の間よ
り襖をさつと豊田内記鑑引提て立出
賜ひヤアく不忠者の政右衛門大内
記成敗せんそ動くなと突かけ賜へ

は扇のあしらひ是が則ち神影の即信
ム、尤々是が奥儀の秘事口傳所を
突出す左の扇、是又即刀三ケの大事
チ、承知く透さず繰出す鑑先を兩
手にしつかさ拜み請けて突共押共大
盤石サ殿得と御傳授下さりませふ政
右衛門感心く自然の立合に傳授を
赦す過分さ大内記満足せり、又今日
の致し方様子有んご窺ふごころ心底
に望み有てわざご我手練を隠し我を
謀りし其趣、大内記承知致してお
るわい。望みに任せ暇をくれるぞ。
ハ、アコリヤヤ持、コレ此刀は手
覺の不動國行敵討の錢別ではない暇
の印ハア不動の文字は動かす動ぜず
本意達する吉瑞の御賜、有難く頂
戴仕るでハアハ、ござりますム、
盃くれよハア政右衛門いつは成す

沼津里の段

切 竹本津太夫

鶴澤綱 造

ツレ 鶴澤綱右衛門

胡弓 鶴澤綱小 延治綱

人形

親 平 作 吉田玉次郎

吳服屋 重兵衛 吉田榮 三

娘 およね 吉田文五郎

荷持安兵衛 吉田玉 徳

池添孫八 吉田文 作

共今日は一つ呑やれハア看くれふ、
一挺の弓の勢ひたり。東西南北の敵
を安く亡せりハ、目出度出立
く、ハア行きやれハアと答へて政
右衛門其儘御前を立か弓末世に武士
の鑑ぞ今世までも傳へける。

沼津里の段

東路も爰も 三下りうたなき
沼津の里、富士見白酒名物を、一つ
召せ召せ駕籠に召せ、おかごやろか
い参らうか、おかごおかご稲叢の
蔭に巢を張り待ちかける蜘蛛のなら
ひさ知られたり。浮世渡りは様様に
草の種がや人目には、荷物もしやん
ご共廻り、泊りを急ぐ二人連れ、立
場と見かけ立止り詞コレハしたり大
事の用をさんご忘れた、大儀ながら

私か寄つた所まで、一走往て来てた
もご、急ぎの用事走り書、さらく
さらく書認め、早うくご手に渡せ
ば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛
逸散に、元來し道へ引きかへす。稲
叢の蔭より 詞旦那申、お泊りまで参
りませうかい。申旦那様、何卒持し
て下さりませ、今朝から一文も銭の
顔を見ませぬ、どうぞお慈悲。さ
ひかけられ詞イヤくわしは今夜は
夜越に行く、サそこお慈悲で御座
ります。ご頼みかけられ是非も無く
詞サそんなら吉原まで何ぼぢや。エ
一おまへ様も、私頼んで持つぢや
もの、えい程に下さりませ。サそん
ならやらしやれ、年寄のよじにせい
でのそんなら持たして下さりませ
チエ忝ないサアお出でなされませ

ヤツト任せば聲ばかり、一肩往いては立留り詞アノけふは結構な天氣ぢやな、アヤツトまかせ二肩往いては息を繼ぎ且那申、向ふの立場に鱷の名所が御座ります、ヤツトまかせ山崎杖する度に追従口合深田に下りし白鷺の、餌ばみをするに異ならず、見るに氣の毒詞親仁殿ちつと持つてやりませうかア、それ／＼危ない／＼、イエ／＼勿体ない勿体ない。ア、氣の毒な足元、最前から見て居るに、氣しんどでならぬこれはわしが足の癖でござります、且那のお蔭で、けうも内入むようござります。モウこなたもいくつぢや七十に手が届いてござります。ア、ソレ／＼合點の行かぬ足取。お氣づかひなされますな、若い時は

小相撲の一番もござりました。ヤツトまかせこなア、さいふ下道の爪先上り、氣の根につまづきひよるひよる／＼詞ソレ見やしやれエ、きつい事をしたの、親指を蹴かいたかヨシ／＼早速に直してやる。そ用意の薬取出し、付けるそ其儘、詞何さどうぢや、痛みは止るむ。コレハ結構なお薬でござります、痛みはこんご直りました。サア／＼御出でなされませ。イヤコレ／＼荷はおれが持つてやる。ア、且那樣滅相な。イヤサ駄賃はやる、氣遣ひさしやんな、こなたの足元、最前から危なうて危なうて荷を持つ方がやつこ氣樂な咄し、もつて行きませう、サア／＼ござれま先に立つ三下り平作は千鳥足しんどが利になる蒔蕪の、砂に成るか

さ悲しさに、小腰かゝめて、且那樣一肩やりませうかい。イヤ／＼是で大分歩きよい、マ、こなたの足元茶めいた物ぢやの、その足取りを狂言師に見せたいわいの、亂れなご言ふて、傳授事に成りそうな事。イヤ且那のおつしやる通り、大概亂れかゝつて居りますわい、ハ、ハ、ハ、ハ、道の伽する笑ひ艸、踏み分けて來る道草に、菊の折草持ち添へて、見合はす顔はこゝ様か詞およれぢや無いか、けふは結構な且那の供したので荷は持たずにお世話になつた。お禮申してたも。コレハ／＼有むたい、もう爰がわたしが内、暫くお休み遊ばせも、昔の残り風俗も、お羽打枯れし松蔭に、伴ひ入るや西日影。わびたる中に二人住、門の柱に記しの

笠、おかけなさるりや庭一杯いつそ座敷へマアお上りこ、親仁が馳走娘の愛、後垂の藍薄くも、マアお茶一つこ差出す、こぼれかゝつた藁屋葺、折悪う湯もわかず、水でなりおみあしを詞ア、イヤ、もう行きまする、扱娘御はよい器量、不眠ながら此内には、せゝなげに咲いた杜若よい床へ生きたいのう。ハイごなたも左様におつしやります、自慢で作つて置きましたれど、近頃は手入れが悪さに、いこふ田地が荒れました何お身に構はず、賃仕事、貧乏は苦にもせず、それにそれは孝行にしてくれます、それで私が年寄つての蜘蛛助も、せめて三文なご肩休めさ、餘りあれがいぢらしさで御座りますコレも、様初めてのお方に、其様な

さもしい咄を。ホンにさうぢや、ハイイヤおよれ、けふは大きな怪我をしてな、コレ、是見よ、爪が起きてある、ア、薬もあれば有るものぢや、あなた様の薬きつい妙薬ありや何ぞ申す薬で御座りますへ。此薬は大切な物、第一金瘡では此場治る妙薬、武家方には尋ねれども、金銀づくでは手に入らぬ妙薬、ご語れば娘は猶ほたく、詞ご様の命の親、一日や二日で御禮は云ひも盡されず、ならう事なら今宵は爰に逗留遊ばして詞マ、娘何云ふぞい、こんな内に泊まして、着は千鰯が一匹無し、虱より外あなたの身に付物は無い。イヤ、不自由は仕付け居ます、娘御があの様に、しなつこらしういはしやるので、どうやら爰に

根が生へた、大事なくばいつそ泊めて貰ふかいご目の鞘抜けし商人も、上手な娘のもてなしに、こるりさなればお枕さ、油氣は無い真味の馳走これも一樹の笠舎り、尋ねる軒の目印當に内に入り詞且那是にござりますか、サお立ちなされませんか。ホ、安兵衛が、早かつたく、そなたは其荷物を持って吉原の鍵屋で宿を取りや、日和が知れぬ早う行きや、雨具の用意は吉原の、鍵屋をさして急ぎ行く。跡見送つて十兵衛は詞コレ親仁殿此娘御より外にもう子供衆は無いかいの。ハイ此およれお上に、男の子が一人あつたれど、二つの年養子にやりましたが又其親の手を離れ今は鎌倉の屋敷方へお出入、よい商人になつて居るさの噂、それ聞

いでさんと思ひ切りました。ソリヤ又何故に。ハテ一旦人にやつたれば捨たも同然我子乍らも義理あるもの今其伴も身上がよいきて、尋ねて行て箸かたし貰うては、人間の道が濟みませぬ、今合ふてもあかの他人子と云ふは此娘一人。ム、それも尤も。其兄貴は今いくつ位ちやの。ハイかうつ、恰度今年二十八、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、母の名は豊三書付け、守袋に入れてやりました、その後このおよれを生んでかゝも相果て、即ちけうが命日で、孝行娘も水手向け、花の立て方ころちやいて下さいませと、何心無き咄の合紋、一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合はせば覺えあり。扱は産の親父様、血を分けた我妹が食苦の有様、有合

はせた路用の金、なま仲親子と名乗つては、受けぬ氣質を何ぞかな、金のやりたい屈託に、胸を痛めて詞コレ親仁殿、何んぞ物は相談ちやが、此娘をわしに下されぬか。エ、奉公にあげますのか。イヤテヤ未だ女房のない男、利發な娘御、商人の嬢に極上々の羽二重地、得心して下さるなら、仕こしらへはこつちから、旅商人のこさなれば、よびむかへる日限は、まだいつとも定められぬ、嫁入りのこしらへ料、爰に少々持たはず、是をおいて行きます、得心かいの、どうでござんす、コレ女房面目無いが最前から、わしやこなさんに惚れたわいのと、しな付きかければついと退き詞さ、様あの方もういなして下さんせ、いかい貧しう暮

して居るまで、あたなめすぎた阿呆らしいと、打つてかはりし腹立顔詞エ、たしなめ、よい女房と言はれるが、何のそれ程腹が立つ事、我が器量がよい故ちやさ、おりやうれしいイヤ申あなた様、よう御親切に惚れさしやつて下さりました、ちやがこのおよれば、女房さいふては、やられぬ譯がござります。ム、そんなら御亭主があるのか、これはく、イヤ實は只今のはほんの座興、主のあ人共存せず、庵相申した、眞平御免にあづかりませう、コレ娘御、機嫌直して貰ひましょアノ痛み入つたお詞、ほんに思へば在所者、おなぶりなさるを眞受にして、お恥しやさにつこりさ、笑ひに心打解けて、咄に紛れてすつぶりさ、日の暮れて

あるに氣がつかなんだ詞三日月様が上つてござる、宵月夜で月燈は入らぬ、その明を伽にして、辻堂の雨舎り、お客様もお休み、足延すこ壁につかへる奥座敷、ゆるりさちやまつて、御寢なりませ、わたくしは此壺所、コリヤ娘はそちらに寝い、旦那様はお小さいけれど、時のほづみでは、主のある池へふんごみなさりよも知れぬ。用心には網を張れちや今夜はおれが股引はいて寝や、寒けれどあなたには、わしがごんざを褌になさ、追風もて来る鐘の聲、いとしんくさ聞へける。およれば一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え残る、佛壇の灯も細々さ、嵐にふつさ氣のつく娘詞

奇妙に治つたさ、様のあの疵、今でも敵の手掛りが知れてから、あの病氣では思ひもよらず、ム、さ心で黙頭き胸を据へ、灯の消へたるは天の與へ夫の爲に拔足差足探り寄り、印籠取り上げ立退く足、蹶く音に目覺ます十兵衛、思はず高聲、何者さ、褌を捕へて引きこむれば、わつさ泣き入る娘の聲平作も悔りし、起上つても眞暗がり、およれくさ云ひつゝさかす籠の埋火、附木にうつし顔見合はせ、娘ちや無いか。旦那様か何故に此の有様。エ、何の因果で此様な情無い氣になつたぞいやい、コリヤ此親は其日暮しの者ちやけれどな、人様の物もじきな盗もさ云ふ氣は出さぬわいやい。エ、親の顔迄穢し居つたさ、わつさ斗りに泣き居

たる。十兵衛は氣の毒顔詞金錢を取つたさ云ふでは無し、是には譚の有りさうな事さ、問はれておよれば顔を上げ詞恥かし乍ら聞いて下さりませ、様子有つて云ひ交はせし、夫の名は申されぬが、私故に騒動起り、其場へ立合ひ手疵を負ひ、一旦本腹有つたれど、此頃は顔りに痛み、色々介抱盡せども効無く、立ち寄る方も旅の空、此近所で御養生、長い間に路銀も盡き、其實に身の廻り、櫛笄まで賣拂ひ、悲しい金の才覺も、男の病ひが治したさ、先程のお咄しに、金銀づくでは無いこの噂、燈火の消えしより、あの妙薬をどうかなさ、思ひ盡しが身の因果、どうぞお慈悲に是申、今宵の事は此處切お年寄られしお前に迄、苦勞をかけ

し不孝の罪、けふは死なうか翌の夜は、我身の瀬川に身を投げんと、思ひし事は幾度か、死んだあごでもお前の歎きま一日ぐらしに日を送る、どうぞ御慈悲に御了簡ま、東育ちの張もわけ、懸の意氣地に身を砕く、心ぞ思ひやられたり。歎きのばしくつくく、と聞き取る十兵衛 詞コレ姉御、そんならこなさんば江戸の吉原で、全盛の松葉屋の瀬川殿ぢやの。ハイデモよう御存知。スリヤ瀬川殿の夫の爲にムウムウと心の目算思案を極め 詞イヤコレ太夫殿、夫の手疵を治す藥懸しいは尤、それ聞いて進べたいものなれど、是は人の預り物此事は思ひ切らつしやれ、今こなた衆の咄しの通り、わしも亦た恩を受けた、サ、其恩を請けた人の爲

に、いづれの寺へも苦しうないが、石塔一つ寄進かしたいが、何ぞ世話して下さるまいか、夫は御奇特結構な寄進でござります、何時成り共御世話致しませう、私も來年は娘の年忌、勤むる功德俱に成佛さやら、是非お世話致しまするで御座ります。どうぞ今度の下り迄、違はぬ様に頼みます。豫ての願ひに書付も、此内に委しうござるま、金一包取出し詞コレ必らず頼んだぞや親子の衆最早夜明けに間もなし、随分無事に親仁殿ま、立出れば平作も、必らず御下り待ちます。姉御さらばさばかりにて、心に一物荷物は先へ、道を早めて急ぎ行く。跡に親子は顔見合はせ金取上げてコレおよれ、詞隨分大事に掛けておきや、夜明迄は間もあ

る、其方も休みやま水入らず、見廻はす傍に落ちたる印籠 詞ア、是は今の旦那のぢや定めて尋ねてござるで有るま、云ふにおよれが手に取つて此印籠は何うやら覺ゆのある模様、ハテ合點の行かぬ、それは是かご能々詠め詞本にそれよ、是やコレ澤井股五郎が常々持ちし覺えの印籠、ハテ不思議なま平作も、金取出しよく見れば 詞金子參拾兩、此書附は鎌倉八幡宮の氏地の生れ、稚名は平三郎母の名はお豊、コリヤコレ我子に付けて置いた書付。そんなら今のお方は、私か爲には兄様。オ、我が子の平三で有つたかい。そんなら最前からの深切は、夫さは言はず此金を、買いでくれた石塔代不思議な縁ま親子は、暫し呆れて

居たりしが、およれば印籠手に取つて、裾はせ折つて馳け出す詞コリヤ待て娘、コリヤごごへ。ごごへとはさしさん、此印籠を持つてゐる、その兄様は敵の手がかり、追掛けて股五郎が、在家を尋ね志津馬様へ尤ぢや尤ぢやが、われでは往かぬ、年寄つたれど此平作、理を非に枉げて言はして見せう、吾も續いて後から來い、ごの様な事があつてもな、必らず出なよ、敵の在家聞く迄は大事の場所木蔭に忍んで立聞きせい、必らずとも愈怒すな合點か、本海道は廻り道、三枚橋の濱傳ひ、勝手覺えし拔道をと、子故に迷ふ三惡道、轉げつ倒びつ走り行く。跡にはおれ身ごしらへ、續いて出でんとする所へ、折から來かゝる池添孫八詞瀨

川様が、孫八殿好い所へござんした今夜爰に泊つた客で、敵の手筋が知れさうな、詮議の爲に吉原まで、さしさんが行かしてやんした。エ、忝ない、シテ其行先は、吉原まででも行くまい、何かの様子は道にて聞かんよ、瀬川に續く池添も、足に委せて三重墓へ行く。實に人心様々に町人なれ共十兵衛は武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立ちし獨旅千本松にさしかゝる。オオイ、ご杖を力に息すた、詞申々旦那様ヤレ、お早い足元。ムウ今呼んだはこなたかあはたゞしく何の用、イヤ只今のお金を、お戻しに參じました。石塔料、ご名をつけて、大枚の金子參拾兩、其の日暮しの蜘蛛助に、下さるも譯がある、又た請けまするにも譯あ

る、雖然此金を請けましては、去る人が立たぬ義理がござります、是をお返し申します代りに、あなたにお頼みが御座ります、お聞きなされて下さりますか。ムハテ一夜さ泊るも何んぞの約束、様子に寄つて頼まれまい物でも無い。ご夕闇月夜の聲知るべ跡より窺ふ池添瀬川、肩唾を呑んで聞き居たる詞シテ其頼みの様子は、ハイ被仰つて下されませ、此印籠の主の在家を承はりたう御座ります。これを尋ねて知りたいばかりに、様々の流浪致す人、夫故娘も廓を出て憂き艱難、是れ知れるも本望成就、娘につれて、私までも、モ、い、此上の悦びは御座りませぬ、貳拾や參拾の端た錢で、露命を繋ぐ私、死ぬる迄安樂に、暮される程の

參拾兩、其金銀にかへてのお願ひ、七十に成つて蜘蛛助が、魂に叶はぬ重荷を持ち、夫は未だ休みもする、子の可愛さいふ重荷は、寢た間も休まぬ一生の、苦痛を助ける薬の名、お前様に親御があらば、子故には愚痴に成る物ぢやと思召しやられて、願ひを叶へて下さりませ、コレ申旦那様。と血筋と義理と道分石、分けて血の緒の三界に、踏み迷ふこそ合道理なれ。親の心を察しやり詞ム、さう有らう。心底至極尤ぢやが、是ればかりは何うも言はれぬ、おれも頼まれた男づく、其方の人が大切なら、此方にも亦大切、譬へ又た在家を聞いても命もなくしては本望が遂げられまい、ソレそちの内に落して置いた、主の無い印籠の其妙薬で、疵

養生達者になつた其上では、望みの叶ふ時節もあらう。親仁殿、サ左様ぢや無いかと、心の替匣、一重明けぬ十兵衛の情の詞サ、夫程お慈悲のあるお方、逆もの事なら其薬の持主、イヤサコレ悪い合點、此薬の持主は、其病人とは大敵薬、參拾兩の其金、敵の恩を請けまいため、戻したでは無いかの、此持主の名を言へば、敵の薬で疵本復、恩を受けては眞逆の時、切先がなまらうぞや、猶且拾ふた薬にして、心置きなう養生さしたか、よささうに思はるゝと、聞いて平作感じ入り詞ア、さうぢやあつた、エ、御前様は恐ろしい發明なお人ぢやの、左様聞きましては、申様もござりませぬ、左様なら歸りましょ、且那樣おさらばと云ひつゝ、

探つて十兵衛が、脇差抜きさり腹へぐつと突立る詞ヤア、何んぞした何んぞした、コリヤ自害か、何故に誰を恨んで、勿体なやまうろく涙驚く娘、聲に手當る池添が、鳴首止むる響虫、草に食付泣く斗り。平作苦しき目を開き詞おりや此方の手に掛つて死るのぢやわいのくハテ、此方さ己さは敵同士、志津馬殿の縁のある、此親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ、コレ、此上の情には、平作が未來の土産に、敵の在家を聞かして下さりいひの、外に聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠慮はあるまい、不思議に始めて逢ふ人、何うした縁やら我子の様に思ふ者何んのこなに引け取らす様なこそこの親が、サア此親仁を致しませ

新 關 の 段

口 豊竹 富太夫

(野) 澤八 助
豊 澤 廣 太 郎

奥 竹本 鍛太夫

ツ 豊竹 つばめ 太夫

竹本 町太夫

竹本 源路太夫

レ 豊竹 駒尾太夫
豊竹 小松太夫
竹本 叶美太夫
竹本 津城太夫

豊澤 新左衛門

豊澤 仙系

うぞ、是が一生の別れ、一生の頼み聞かずに死んで、迷ひますわいの
 〳〵コレ、拜みます〳〵旦那様さ、
 子故の闇も二道に、分けて命を塵芥須彌大海にも勝つたる、誠の親に初めて逢ひ、名乗もならぬ浮世の義理孝行の仕納め詞何處に誰か聞いて居まいものでも無けれど、十兵衛が口から云ふは、死んで行く此方さんへの餞別、今端の耳によう聞かつしやれ、股五郎が落付く先は九州相良道中筋は參州の、吉田で逢ふたご人の噺、エ、忝ない〳〵、アレ聞いたが、イヤ誰も無い誰も無い、聞いたは此の親仁一人夫で成佛しますわいの〳〵、名僧智識の引導より、前生の我子に介抱請け、思ひ残す事は無い、詞早く苦痛を留めて下され、

親子一生の逢ひ初めて逢ひ納め、親仁様、平三郎でござります〳〵、チ一兄かい、エ、顔が見たい〳〵、顔が見たいはいやい。チ、御尤でござります〳〵親父様。モウ御臨終でござりますぞへ、御念佛を申されませ、チ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛〳〵〳〵と唱ふる十年十兵衛か、こたへかれたる悲歎の涙、始終うかいふ池添が、小石拾ふて白刀の金、合はす火影は親子の名残り、跡に見捨て三重別れ行く。

(木本) 新 關 の 段 (口)

別れ行、藤川の新關ご人には云へど影の口一村こもる松影に茶屋の娘のお袖さて年は二八の後や先また内證は白齒の娘雪氣いさはぬ寒空に水の

人形

娘 お袖 桐竹紋十郎
 和田志津馬 吉田扇太郎
 奴 助平 吉田玉松
 團子屋 吉田榮三
 女房お福 吉田文五郎

鶴澤芳之助
 鶴澤寛左市
 豊澤新三郎
 豊澤新之助
 豊澤新吉助
 豊澤新吉助

出花やせんじ茶の佛をだしに参詣人
 黒谷の御上人鎌倉へ下向の道此の山
 中の法僧寺に今日で三日の御逗留御
 符御札のお影にて啞が物云ふ鬻が治
 る膝行のおば、がちよつと立てちよ
 こく走りの禮参り御札参りの大勢
 がどんやぐぐぐぐぐぐぐ茶
 屋の床几に腰打かけ何さ太郎兵衛さ
 んきつい人群集じやの扱まあ聞しや
 れ御符のお影で奇妙丁來けぶられつ
 妙ふしきな事がござるての吉田の宿
 の摘栗屋さ云ふ炭屋の子が痲瘡で目
 がつぶれ何が一人子の事故夫婦の衆
 がほつ心して本山の法念様へ本願か
 けて本腹さそそ奉加帳を拵へて報恩
 者功德の爲さ方々へほり込で頼んで
 見たればマ、聞しやれ、あたまの
 まん丸こいこわけのないお上人様か

ぬゝらのヤめつさおはいりなされた
 ら母親は有難ふて、きもにこたへて
 アフンミ云て悦たさいのアけたいな
 悦びようじやなサアどうでも黒谷様
 の味がよいと見へるわいのふ何が
 十念を請るやら御符を頂くやら其夜
 からシユくくくくくポント目む明
 きましたさいのアー花火見た様な音
 じやのふハテ知れた事玉がでて光る
 のじや物アハ、ハ、サア夫れからこ
 云物は吉田中がひつくり返りでんぐ
 り返りさんぼり返り雨蛙やそんな者
 は出やせなんだこの此山中にお泊り
 故モ毎日くの参詣人何さマア有難
 事じやこんせんかいのハテソリヤ其
 筈の事いのそりや又なぜにサア片一
 方が黒谷さん片一方は炭屋の子そん
 なら黒いそ黒で縁があるじやないか

いの縁なき衆生はごしがたしハ、
 ー、ーヤこちらも、いんでコレ縁の
 ある嬢が焚た御符をば頂きませうと
 打笑ひエホー、ホー、ホエホー、
 ー、ー、ー、ー、皆ござれ我家
 へ。

(床本) 新開の段 (奥)

父の教へを守らざる其罪科の降り積
 る、雪氣の空もいこひなく姿を略す
 和田志津馬敵の行衛知されば空しく
 過る光陰の矢たけに心關所の前、ヤ
 コレ姉様最前より此茶店で待合はす
 体の人は見へなんだか、イエ、左
 様なお方は見請ませぬ然らば暫しと
 腰打かけ、コレ姉さん、此遠目鏡は
 往來の慰みか、イエ、慰みではご
 ざりませぬ、私しがさ、様は此關所

の下役人もし切手なしに拔道を通る
 人が有ふかぞ吟味のためにこの目鏡
 と聞て志津馬が心の當惑、差當つた
 る、切手の用意ハテごぶがなご思案
 顔お袖は一つ心志津馬が顔テモよい
 男ご思ひ初め言ひ度い事も娘氣の口
 へ出兼る茶の花香、茶碗ばかりを手
 に持て、差出す心の思はくは汲で知
 かし目遣ひに志津馬も扱はご心付我
 に心なかけしこそ幸ひ切手の手むか
 りご心でうなづき差寄てコレお娘
 ちご頼みたい事があるが何ぞ聞てく
 れる氣か、アイ私もお前にお頼みが
 サアどの様な事なりと、頼みとあれ
 ば引はせぬエ、忝ない、わたしも
 お前故ならばどの様なお頼みでもい
 こひはせぬと寄り添ばヤそれ聞て落
 付た、何を隠さう我身のう今宵中に

此關所を通られば我一命にかゝる事
 こなたの覺へし拔道を何卒教へて貰
 ひたい、死んでも忘れぬコレ頼むと
 色で仕かける我身の大目、じつとし
 むればしめかばす、袖は人目の關の
 門、チ、なるほごくれ六つからは通
 路ならずそれまでに私が、筋きもし
 間違へばわたしがお供し立退んコレ
 申し必ず氣遣ひ遊ばすなご思ひ合ふ
 たる他生の縁、二人が望は二道の一
 筋道を急ぎの道中、杖箱刀にく、り
 つけ通りかゝればお袖ばよびごめ申
 しお飛脚様お休ご言へば奴らさか立
 ごまり、イヤモ呼かけられて姉様に
 恥をかゝしてよいものか、ア、まだ
 八つに間もあるべい、ドレ一ぶくせ
 いご腰打かけア、ヤレ、くたびれ
 た、ヤ申しお客さま眞平御免なさ

いと言へば志津馬も何氣なふお飛脚はどれからお立なされしな、ナアニ身共が拙者かやつおればかちかな、エー下拙は鎌倉扇ヶ谷の四ツ辻切通し夜前濱松泊り、イヤモ日お短くて漸々こゝまで聞より志津馬の心當り欺して聞んご傍に寄り扱々お早い事私共は何として、エー浦山しい足元さ、咄しを盪に茶の出花、一目見るより餘念なくお袖が傍にぐにや

のヤモ其うつやかさを見てからは正喜仙せすに居られうかい、それにそちらを山吹さばさりさは連ないごふよく茶、ちよつごこちらをマア麥茶わつちが戀茶を叶へてなら、朝茶から、晩茶まで體を粉茶さばつたい茶足に豆茶が出来る共ちつごもいさはぬコレごふ茶わつちが言事茶にせずご玉露ながら聞てたも、コレ嘘茶ないぞや、實のこつ茶、是茶くそつ茶むかづごこつ茶むげ、茶りさばすげないコレごふ茶眞實もぢにへい、ほの字ごコレマれ、らのれの字海道往來の此私がそもじをふつご見初しも袖の振合せ他生の縁不便と思ひ是申しごふぞ叶へてエーマ、い下さりませはもふくご取付て牡丹の盛りに山峰の花の露吸ふ如くな

り、コレイナア奴さんじやらくごそんな事より此様な面白いもの見る氣はないかご目鏡の傍へひよつか、ひよか、ご助平はうつかりひよか、ごささしのぞきハアコリヤなんだ、火吹竹の化けものか、尺八見る様なもの突付け何の面白いコリヤ面黒いわい、チ、是ればなア奴さん、そりや見よふ違ふて有ふさいだ方じやなしに明た方の目でごらふじませ、ナニ明た方、明たのふさいだのさ目の玉の戸びらば有まいし馬鹿くしい、併し美くしいお娘の仰せ心を改めさらば一見、エヘン仕か、いハアテモ大勢、ヤ見へるぞく、ア、向ふ通ふるはおらむ仲間の親分だ、コウ親分何も用事ねへかい、ハ、ア氣がふさいであるか、も

のを言はれへの、エーうつちやつと
け、ハア向ふは川だれ、チー川向
ふからきいた風のやるふが来るぜ、
ア何だかひるつたぜ、チーコラおら
が見る前でものをひるつたら二つ山
だ半分よこせくくアーひるつた
んじやれい、足袋をぬいで腰にはさ
むはコイツコリヤ川を渡るさ見へる
はいアーコリヤく其川渡るなら少
し下の方を渡れそこは深いぞく
く少し下を渡れ、エーごふじやう
なやらふだ、ソ、ソレ見る着もの
がぬれるくもつ尻をまくれく
コリヤイくくハアまくらね
へ答だ、アイツふりさ見へるはいア
ハ、ハ、ごふく無事に渡つたはハ
ハ、ハ、川向ふは茶屋町と見へるかけ
行燈がかいつてあるな何だ、戀をす

るがやいとし河内屋、君を松葉や、
おつと、吉田屋、高い山田屋、谷底
美濃屋、宇治屋、夏見屋、花屋、堺
屋が、ハ、ハ、ア、藤屋の二階に客
が大騒ぎをやつて居るはい、エ、藝
子に太鼓に、舞子に、踊り子、肴は
きんこに生子に、いりに、敷の子か
ヤこいつべら棒に子お好だなハ、ハ、
ア、ア、コリヤく仲居いやがる酒を
そむむりに呑すな、こぼれるはい
くソレ見る、こぼれたはア、コリ
ヤく雑巾を早く持てこひ、手拭で
もかまはない、ソ、ソ、手拭がなく
ば前垂はづせ、チエーア、ソレ疊へ
吸込早く舌でなめてしまへくヤレ
く世話だなく是だから早く隠居
が仕たいわいくヨウくこつちの
小座敷は女郎買だな、こすいやつた

な、アレく二人が何かコウさ、や
いたり、ひつひたり、エ、にくら
しい奴だナ、ア、コリヤ女、其客あ
まり大事にするなしわん棒の柿の種
だ、何にもよこしや仕ねえぞ、それ
見る、しない證據が今知れた、一腹
の煙草を二人して、呑じやないか、
ソレそふ言ふきたないやつだ、イヤ
までよ、ごふが見た様な女だ、チ、
そふだ、アリヤおらがなじみのおき
のだ、チ、おきのに違ひねへ、ヤイ
コリヤおきのく、やい、コリヤもの
をぬかせくヤイコリヤ、わりやお
らに何ぞ言ふた、わりやコレ申し助
平さんへ、お前はアノ口元が、可愛
らしいと言ふてはなめ、イヤ鼻筋が
通ふてあると言ふてはなめ目元がし
ほらしいと言ふてはまたなめく

くく廻はして大事のく奴髪ま
でなめばがして仕廻やがつたアノ爰
なげじん女め、それに何だ、おら
が見る前で尾籠千萬、よくもおらを
欺したな、鎌倉で人も知たる澤井殿
の家來、澤井助平もふ了簡むならな
いさ馳出せしがハアハアア、今のば
ごごだ何だ何にも見へねヘコリヤ
ごふだと言ふにお袖が差覗きチーあ
れは吉田の茶屋の二階爰からは一里
もあるところ、腹立なさるだけが損
ハアアヤいか様聞けば一里ありか、
遠方から憐氣するは髻に耳さふする
に同じ事、さば言ひながら残念さ又
差覗きうつくなれば是幸ひ扱は澤
井の家來よな志津馬は邊りに氣を
付けて状箱の封押し切一通うばい取元
の如くに直すのも知らぬ助平一心不

亂打眺めヨウくく小女郎枕さ
蒲團をもつて來た、エ、いまくし
いたまらぬわい、コリヤもふごふも
ならないさ古木の如くしやちばり返
り、横にごつきり朽木倒し登り詰た
る奴いか、糸目の切し如くなり、傍
に落ちたる紙入の中より出る關所の
切手、見るにお袖は飛立つ思ひ嬉し
いやらこはいやら、結ぶの神のこの
切手さ志津馬に渡せば懐中し我身の
難儀は遁れたが斯して置れぬ奴殿コ
レ顔へ其水吹かけたと言ふにお袖が
うろたへて、わきかへりたる茶釜の
茶頭へさつぶり打かくればチーアッ
い、いごなた様かやかたじけなや、
生れ付てせがれめが虫早く時々發る
疱瘡子に酒がかいつてコレマ助かつ
たさ、咄せば二人は顔見合せおかし

さ隠すばかりなり、時も違はず關所
には打拍子木に助平が一つ二つ三つ
四つ五つ六つなむ三七つの時代り、
大切の此状箱一時も早くお届け申さ
ん、關所の切手さ紙入の内をさかせ
ごハテめんよふな南無三寶、後の茶
店で落したか、ドリヤ一走りさ立出
れど、水氣取られし河童奴、ふなり
くく池水のごみに逢たる如くにて
もこ來し道へ引返す、お袖は後を見
送りて、此間に早ふさ茶店の道具を
門内へ運ぶかた手に顔眺め見あかぬ
目鏡の戀男、志津馬は一心敵の手が
り、白齒娘の手を引て岡崎さして
歸りける。

竹藪の段

豊竹綾太夫

鶴澤叶太郎
野澤喜代之助

人形

蛇の目眼八 吉田玉市

櫻田林左衛門 吉田玉幸

唐木政右衛門 吉田榮三

(床本) 竹藪の段

鎌倉の奥女中お里歸りの道中、人目に見せる紙乗物、關所の内へ昇入り此海道を住家とする蛇の目の眼八人喰ひ馬に櫻田が手に入れ顔に先に立コリヤ蛇の目今咄した事男と見込で頼むぞよ、何であらふと見付け次第に合點が、エ、親方氣づかひさあんな、此蛇の目が見入れたら一寸も動かしやせぬ、ハテサテ氣味のよいやつこ、紙入より取出し金子千疋手渡し、當座のほうび納めて置けさ、エ、忝い馬士に千匹さば仕合はせ吉の此蛇の目、何で有ふと見付けたら皆撫にする、一チこつばと祝ふさい先、林左衛門、晩の泊りで何かの事しめし合さんサアこいこ門内さし

て入相の鐘もろ共に關の門門はつしこしむる音、宙をかけつて政右衛門、關所の前に立よれば、門戸かためて、出入もならず暮時でわからぬ後、妾は林左衛門に違ひなし、スリヤ股五郎を同道には極つた、エ、付け込だ敵を取り逃せしか口惜やこ齒がみをなして、身をもだへ門内をにらみ付け、無念涙にくれ居たる、チ、それよ、志津馬と爰で出合ふ約束但し先へ入込だか、何にもせよ、出合所は一筋道今夜中に此關越れば最早敵は手に入ぬこ、行つ戻りつ思案を極め、兼て聞き居る抜け道は體に竹の林の中、後をしたふて急ぎ行く。

岡崎の段

(床本) 岡崎の段 (中)

中 豊竹島太夫

豊澤猿太郎

次 竹本大隅太夫

鶴澤道八

切 豊竹古靱太夫

鶴澤清六

人形

娘 お袖 桐竹紋十郎

和田志津馬 吉田扇太郎

幸兵衛女房 吉田小兵吉

山田幸兵衛 吉田玉治郎

唐木政右衛門 吉田榮三

捕手小頭 吉田文之助

夜廻り番太 桐竹紋太郎

蛇の目眼八 吉田玉市

組子 大ぜい

世の中の苦は色かゆる松風の音も淋しき寒空や霞交りに降積る軒もまばらの放れ家は岡崎の宿はづれ百姓ながら一理屈主は山田幸兵衛こ人も心を奥口の障子隔て女房が轡車の夜職歌いこし殿御を三河の澤よ、戀の掛文杜若、更て忍はじ夜は八ッ橋の水も洩さぬお手枕、鄙も都も小娘の誰が致へれど戀草を見初惚初打付に雪の夜道の氣さんじは互に手先持添る傘の志津馬にもつれ合ふじやらくら咄しいつの間に戻るお袖が我家の戸口、チーしんきいつもは遠ふ覺えたに意地悪ふ今夜の早さ、まだ咄しが残て有後へ戻つて、下さんせぬか、去さては譯つもない、日は暮る草臥

足、後へも前へも雪の段鉢の木の焼火より暖なそもじの肌で暖めて貰ふが御馳走、サ早ふお宿を御無心さぢやれた詞にぞふ言てよいか悪いか白齒の娘聲聞付て誰じや、アイ、アイ、か、様わたしじやはいな、チーお袖とした事が、此寒いのに何して居やる、戻りが遅さに待兼た早ふ這入りや母親の詞をしほに内へ入る、さふ歸らふと思ふたけれど道連のお方、有てそれで思はず夜に入りましたム、道連のお方さば、アイ行暮した旅のお方、それはくきつひ御難儀今宵一夜はこちの内に留て上て下さんせ、申苦しうござりませぬ、こちへお道入遊ばせよ呼れて志津馬はおづくさ小腰かゝめて、御赦されませ獨旅の浪人者、日は暮る足は損ふ

詮方盡て此お願近頃わりない事なから一夜のお宿を御無心と言ふも心に荷物の葛籠お袖は見るより申、かゝ様さゝ様の旅葛籠あそこに戻つてあるからは、チ、親父殿もけふ暮前歸らしやつた、旅草臥で、癡てじやわいの、エ、遅ふても大事ないに、早い事やま其後は言ぬ色目を見て取る母日頃から二親がちよつと出ても戻りを案じる孝行なそなた、ごふやら不興な顔持は堅い爺御の氣質故、折角お宿を借ませふとお供仕やつた道連様へ約束も違ふか案じ過ての事であらふ、醫爺御は得心でも此母が不得心、サなせこいや、今でこそ茶店の娘、去年までは鎌倉のお屋敷方へ腰元奉公、御主人さまのお差圖で去武家方へ末々は縁に付ふ堅い約

束、其許嫁の夫を嫌ひ無理ひま貰ふて親の内へ戻つて間もなふみだらが有ては以前の御主ばかりぢやない、顔はしらねど約束した舞殿へどの顔さげて言譯せふ、サア斯いふは言もの、そなたに限り、そふした事は有まいけれど時分の來た若い娘の有内へ若い男、一夜は愚半時でもひとつ所に寢伏せば戸は立られぬ人の口、其上連合幸兵衛殿、國守よりのお目がれて、新關の下役を勤さつしやる今の身分、常の百姓とは違ふて物事を正しうするも役柄故、必ず悪ふ聞やんなやと、言れて何と返事さへお袖が意見の相伴に志津馬も手持投首を見る氣の毒さ母親もさのみはいかじま何氣なふ、此様に意見するも轉ばぬ先の杖さやら、イヤ申、御浪

人様、お心にさへられて下さりますな泊ます事はならず共せてお茶なご入花を一つ上ふご尻輕に勝手へ。
(床本) 岡崎の段 (次)

行間待兼て娘はおづ／＼志津馬も傍サ誰もこぬ間に言残した咄しの後を納戸でこ取手をすげなく振放し見ろかげもない旅の者に關所での情と言道すがらもあた嬉しい詞を誠と思ひの外許嫁が有からは主ある花に落花狼藉密夫なぞと重ねて置いてモウ四つに間も有まい夜の更けぬ内宿取て寢て花やろと立上る袂に縫りコレ申有て過たる縁定め今更こやかう嬢様の今の詞もお心にさばつて私へ當言を無理とはさら／＼思はれご恥しなごらけふまでも殿御に惚たさいふ事は

しらぬあがないふつゝかな在所育の
此身でも結ぶの神の御利生でお顔見
るから思ひ初どふぞ女夫に成りたいと
胸はしがらむ藤川の關は越ても越か
ぬる戀の峠の新枕かはさぬ中に胸然
な難面事をいふ手間でつい可愛さ一
ご口に言はれぬかいなさ絶り寄しど
も涙にかこち言岩木なられば遠にも
振捨てたき戀のわなかかる折柄門口
へいきせき來かゝる蛇の目の眼八、
お袖は目早く一間の内無理に志津馬
を忍ばせて何氣ない顔入口から差覗
いて。ヨウ々味いぞ々毛虫の親
仁や母者は居すお娘一人はない圖な
首尾さ這入やいなや後から帯ぎはほ
ふさ引だかへコー、お娘、
コレマごぶじやぞいの、
常から目顔でしらししてもびんしやん

こはれ廻る馬よりおれが太鼓の
ぶち立場で草役見付た様にコレマさ
んばい仕籠て居るわいやい、いやか
いのふ、否なナ風にもヨなび
かんせナヨとけつかるはい、いや、
いや應なしについちよ、コレ
まつるんでおくれさしなだれか、れ
ばエ、きたない、うるさい、いやら
しいと突退られても押強くヤモ誰で
も初めはいや、ご口では言が鯨汁
ご色事は味覺へてからやめられるも
のじやないてへ、が、それ
もいやならおれも意地じや今夜藤川
の關所を破つて忍び道を通つたやつ
召捕よふと岡崎中は上を下へご詮議
のごふ中うさんなやつこの相合傘ち
らりさつないだ此眼八あくて洗ふた
蛇の目が詮議ヤはへづらか、してこ

まそふさかけ入向ふへ立ふさがるお
袖を突退け立切し障子引明け見て恠
りコリヤ違ふたご狼狼眼かけ出す蛇
の目も利腕捻上立出る主の幸兵衛百
姓なれ共、新關の下役をも相動むる
身共も居間へ泥脚を切込コナヤ狼狼
者めが簡ならぬやつなれ共所存有
故赦しくれる、此以後きつと嗜みお
らふご投付らるゝと思ひのほか突放
したる手強さに底氣味悪くうち、
もち、見るにお袖も嬉しさ、い
さしい人の納りを心一つに兎や角ご
案じ彌増思ひなり弱みを見せぬ悪者
根性お上にごつさり上股打コー、
親父殿、イヤコレ親父殿役目、
ごいばるゝが其大切な關所を抜た科
人を吟味する最中に妾の娘が連て戻
つた旅の侍、詮議する此眼八なせし

め上て手込にしたんじやい、ム、娘が連立歸つたさば其侍は何處に居るエ、イヤサアノ造さつきに、爰の内へヤアだまりおらふ娘にうつ惚れ最前より法外の有條承引せぬ故無法の當推よし又其侍さやらむ此内へ来たにもせよ是ぞと言べき證據もな侍ささいへば委く引捕へ關破りと言べきか勿論、儂は當所の馬追誰か赦しての詮議呼はり長居ひろがはく、し上げ御地頭へ引立ふかモシくく去遣はお氣の短いコレ氣の短いイヤモ商賣か馬方だけ豆から發つたいざござで親仁様の寢所まで踏馬御免さへらず口後をも見ずして逃歸る、後見送りて落付娘忍ぶ志津馬も一間を立出覺へなき身に關破りも今の危難をまぬかれしは御亭主の御

厚志故忝なしと手をつかへ禮の詞にヤ是はく痛入先くお手をあしれい、サ、ひらにく承れば御浪人とな定て仕官のお望で上方へござるので有ふイヤく様子有て世を忍ぶ獨り旅、則ち當所岡崎にて山田幸兵衛殿方へ密に參る浪人者ぞ聞て不審の眉にしは其山田幸兵衛は身共の事シテ其元は何方からム、スリヤ貴殿が幸兵衛殿かヤ拙者は鎌倉の肥懸武士澤井城五郎に縁有る者委細は是に藤川にて手に入一通手に渡せば封押し切て老眼につぶく續くも口の内、様子しられば氣遣ふお袖幸兵衛さくく讀終りム、某、性根を見込和田靱負を討て立退澤井股五郎が力となつて吳よそ有頼の書面の趣シテ此使を勤らる、其許は

城五郎殿の御家來か尋る詞は敵の手筋は幸ひさ氣色を正しハア幸兵衛殿の御懇切、承る上からは何をか隠さん某こそ刀の遺恨止事得ず和田靱負を手にかかけし澤井股五郎と申者アノ御自分が股五郎殿か、いかにもヤ是はく存じも寄らぬ是迄互ひに御意得れば双方共にしらぬ同士コリヤく娘嫁許の舞殿じやはいエ、そんなら私か鎌倉へ御奉公の其中にチ、サ約束致した花舞殿まよふこそ尋て下されたさ悦ぶ聲の洩れ聞へ母も立出ヤレく思ひがけもないこな様が舞殿で有たかいの、マ聞たご違ふてよい男コレこの様な舞殿でもそなたはやつぱりいやかいのふ、ア、勿体ない事言しやんす二世も三世も替らぬ夫モウくいつ迄も爰に

居て可愛がつて下さんせこ心に思ふ
有たけは言で思ひを押包むお袖が嬉
しき二親も俱にほたく悦び顔ソレ

女房娘稀の珍客何はなく共盃の
用意をしやれ、アイヤ〜其お心づ
かひ却て迷惑ハテ舞殿の他人がまし

い舅入やら舞入やら祝言もごつちや
に煎の在所料理みしり肴の船盛より

外に馳走は手入すの娘のお袖が初も
の一種でアコレか、様又そんな事を

チ〜わしとした事があんまりうれし
さに思はずしらすついホ〜ハ〜ハ〜

い〜いか様ばのいやる通り敵持
の舞殿に七十五日生延ばるこはヤ是

も吉左右目出たい〜ドレ〜案内
いたそふさおごけ交りに先に立、親

の手まへを恥らいて赤らむ顔の色直
しとけて見せても下心赦さぬ志津馬

が肌刀胸にれた刃を相の間の襖押し
明け入にけり。

(床本) 岡崎の段 (切)

既に其夜もしん〜と遠山寺に告渡
る早や九つのかれてより内の案内は

知たる眼八裏から忍んで納戸口思は
ず蹶く明からの駄荷の葛籠を幸さあ

たふた押明忍び込鼻息もせず窺ひ居
る斯さば人も白雪の道も厭はぬ政右

衛門心も關の忍び道遁れて急ぐ後よ
りも數多の捕人が見へ隠れ暮ふ足後

氣轉の唐木兩腰そつと道端の雪がき
集め押隠す透も有せずばら〜く〜

腕を廻せと追取巻ヤア仔細も言はず
理不盡に繩かゝるべき覺へはないと

言はせも果す双方より捕たさかゝる
を引はづし苦もなく首筋一握み一ふ

り振て右左弱腰蹴すへて獨投透間を
得たりと二番手が肘からみをふりほ

どきほぐれを取て眞逆蹴頭轉胴骨雪
道に打付られて叶はじこ入かばりた

る三げん手打込十ていかく〜り脾
腹を丁ご眞の當烈しき手練にさしも

の組子さうなくも寄付す後ずさりす
るばかりなり見かれてかけ寄捕手の

小頭ヤア上意によつてむかひし我々
手向ひなすは關破りの浪人者に相違

はない腕を廻せと詰かくればヤア處
忽なりお役人急用あつて此如く夜道

を急ぐ旅の者丸腰の某を關所を破
りし浪人さばヤモ身に取て覺へぬ難

題外を御詮議なされよさちつ共恐れ
ぬ丈夫の行動始終を見届く幸兵衛は

戸口をかけ出押隔憚りながらお役
人へ申上る關破りの御詮議半深衣に

一人歩行の旅人御疑ひは御尤併し
 此者は鎌倉飛脚仔細有て此幸兵衛能
 存じ罷り在れば慮外の段は御用捨有
 無難にお通し下さらば有難き仕合せ
 さ、かばふ詞に政右衛門ムウそうい
 ふこなたは何人と言を打消イヤサコ
 リヤ身に覺へないにもせよお役人に
 慮外の手向ひア、不屈至極と呵り付
 けしづく、と歩寄倒れ伏たる組子共
 引起して死活のいげ、いづれもお心
 隨にござるかお役目御苦勞千萬と苦
 い挨拶氣の付捕人幸兵衛も威義を正
 し承れば關所を破りし科人は帶刀
 の浪人者彼は町人サ此丸腰懼りな
 らハ、い、ヤ人違へかやうな義に隨
 取る中彼曲者を取逃さば詮なき事早
 くお手當なされよと言れて實にもこ
 捕人の小頭ムウ其方が存せしと申詞

に相違も有まい是よりは山手へか、
 り彼曲者も詮議せん家來まぬれご引
 連れて元來し道へ引返す影見送て政右
 衛門ハ、ア危ふき場所を遁れしも全
 く貴公の御厚志故がお禮は重ねて、
 心もせげば失禮ながらお暇申すこ
 立上るを暫しごこいめ昨今なれど折
 入てお尋申すサ仔細も有げ見ぐるし
 けれど拙者も宅へ暫時ながらご老人
 の詞に是非なく政右衛門然らば御免
 と打通れば門の戸引立主の幸兵衛傍
 近く差よつて多勢を相人に今の働き
 感心の餘り役人を欺歸し難儀を救
 ふは身共ご寸志むそれに付けてもいぶ
 かしきは貴殿の柔術正しく拙者も流
 儀に同じき神影の極意手練せられし
 旅人はごいぶかる色目ごなたも不審
 神影流の極意なりと見極められし御

老人ハテ心憎しご双方がためつすが
 めつ見合はす顔ム、お別れ申て十年
 餘り相好は替られしが生國勢州山田
 にて武術の御指南下されし要様では
 ござりませぬか、チ、其詞で思ひ出
 した我勢州に有し節幼少より育上し
 庄太郎で有ふむな成程、然らばあ
 なたが其方おヤ是は、ご手を打て
 盡ぬ師弟の遠州行燈かき立、打な
 がめチ、稚顔に見覺有庄太郎に相違
 はないハテ、健に生立しなハア先生
 にも御堅勝でチ、サ、無事の對面
 互に満足去なりむらア、思ひ廻せば
 過行月日其方は山田の神職荒木田宮
 内が倅なれ共幼少の砌父母に離れ孤
 兒ごなる不便さに手搦にかけて育る
 所稚立ちより武藝を好むは末頼も
 しく思ふより門弟共へ稽古の次手一

手二手と教ゆる中一を聞いて十を知る
頓智さいひ器用さいひ十五以下にて
鎗術 劔術 鎖 鍊 體術 柔に至るまで
諸歴々の弟子を追抜き神影の奥義を
極むる無双の達人何卒大家へ仕官を
いたさせ親の氏をも繼せんご心頼み
に思ふ中未熟の師匠と見限りしか家
出致して十五年便りなければ折にふ
れ此庄太郎はいかゞなりしと雨につ
け風につけ思ひ出さぬ事もなく夫婦
打寄りそちが噂シテ只今の住所は何
國有付さてもあらざるかと師匠の慈
愛に政右衛門思はずはつて手をつか
へ親にもまさる大恩の師匠を見限家
出せしご御疑ひばさる事なれど常々
武術の御講釋小耳に覺ゆる其中に一
派に心を凝さんより諸流に渡り修行
をなすこそ此道の心かけと御教訓心

魂にしみ渡り十五歳にて國を出普く
諸國を遍歴し武術を磨く武者修行天
運に叶ひ然るべき主取も致せしかご
生れ付たる好色者亂酒に主人の機嫌
を損じ只今は元の浪人たよるべき方
もなければ、もし上方に有付もやご
心ざしてまゐる所思ひがけなく先生
に面目なき對面さうかつにそれご身
の上を言はぬ底意はしらがの母、様
子聞あてや一間を立出チ、庄太郎テ
モ成人仕やつたの連合の眼鏡に違は
ぬ武藝の上達器量を見込で頼み度い
仔細があるご聲をひそめそなたの家
出した時は三つ子のアノお袖もふ十
七になるはいの縁有て許嫁の其筆殿
を親の敵と付れらふ者が有る故まさ
かの時の後、楯力になつて下さらば
餘の人千人萬人にも勝て嬉しう思ひ

ます、チ、い、かにも、庄太郎と知
らぬ先難儀を見兼ね救ひしも其義を
頼まん下心ご師匠の詞聞きもあへず
政右衛門擗寄てムウ其付れらふ敵の
假名はチ、サ、筆、さい、ふ、上、杉、の家、來
澤、井、股、五、郎、さい、ふ、侍、付、れ、ら、ふ、は、和
田、志、津、馬、ご、サ、聞、た、ば、か、り、面、体、は、し、ら
れ、共、ヤ、モ、高、が、知、れ、た、る、若、輩、者、幸、兵
衛、片、腕、にも、足、ら、ぬ、相、人、が、爰、に、一、つ、の
難、儀、さい、ふ、は、志、津、馬、ご、姉、筆、唐、木、政、右
衛、門、さい、ふ、や、つ、音、に、聞、へ、し、武、術、の、達
人、譬、五、十、人、百、人、加、勢、あ、る、ご、て、政、右、衛
門、に、は、及、ば、ぬ、く、ま、だ、し、も、唐、木、に、立
合、は、ん、は、其、方、な、ら、で、外、に、は、な、い、何、ご
ぞ、筆、に、力、を、添、助、太、刀、頼、む、庄、太、郎、ご、餘
儀、な、き、頼、み、に、政、右、衛、門、ム、先生、に、内
縁、あ、る、股、五、郎、殿、に、力、を、添、れ、ば、少、し、は
師、恩、を、報、ず、る、理、り、い、か、にも、助、太、刀、仕

らふサ此上は澤井殿の隠れ家へ御案内させき立つ唐木忍びの眼八蓋押明てさし覗く影をちらりと見付ける幸兵衛心付ればヤレ／＼嬉しや庄太郎の今の詞聞たからは千人力ドレ筆殿へさ立上るをハテ扱いらざる女の指で股五郎殿の行衛は知れぬナハテ壁に耳有る世の諺それと慥にしられ共言い聞かすには折が有ふがうかつにそれと明かさね咄しの蓋は取らぬが秘密さ／＼こやら一物歩行の小助門の戸叩いて申／＼庄屋殿から急な御用只今お出さ／＼んきよ聲ハア又關破りの詮議で有ふいやと言れぬ役目の不肖さいひつゝ羽織引かけて嗜む大だらさしこなす腰もかゝみし海老鏡を葛籠にしつかまコリヤ女房今も言ふた咄しの蓋戻つて来るまで明け

ぬ様心におろした此鏡前ナ合點かま詞の謎聞く女房もさげやらぬ雪道いさばぬ高足駄指傘の骨組も人に勝れし五調作り歩行を先に幸兵衛は心を残して出てゆく戻らしやるまで廢かれもせまい糸績ながら咄しませうハア今に御上根な事マア火にお當りなされませ私も是から下男同然におつかひなされて下さりませ何のいな様は大事のお客マア煙草吞でゆるりつと寝轉んだらよいわいの、イエ／＼勿体ない師匠の内ホンニ此煙草はごこから参りましたエソリヤ親仁殿が旅戻りに貰てござつた上方煙草ハアあなたのお口に合ふのなら服部か國分か此天氣に斯して置たら濕りましよ、ヤ留守事に刻んで見ませう幸い爰に切臺庖丁底に劔の葉拵へ敵

を聞出す煙草の小口葉巻手早くきり／＼こ大の体を小廻りの奉公ぶりも哀れなり、外は首せでふる雪にむざんや肌も郡山の國に残りし女房の思ひの種の生れ子を抱てはる／＼海山をたどり／＼て岡崎の宿より先に日はくれて、いづくを宿さ定めなくがはご轉ればわつこ泣く子をすかす手も冷氷る雪の蒲團に添乳の枕いんのこ／＼／＼に友さそふ犬の聲々夜廻りの番が見付ける小提灯ヤイコリヤヤイ軒下に何で寝るのぢやサきり／＼いけさ呵られてハイ／＼／＼私に秩父坂東廻る順禮癪でおなかをいためまするちつこの間置しやつて順禮でも幽霊でも在の中に寝さす事はならぬ／＼はい意地ばるは猶うさ人者棒いたやくなご提灯突つけ見る

つまはづれの尋常さ白眼だ眼うつかりと細目に明る戸の透間内から覗く夫婦の縁思ひがけなき女房お谷ハツと恠り指合せ包む我名の現れ口悪い所へ切りかけた煙草の及金胸を刻むと人知らずフウ見た所わ小盗みする風俗共見へぬ此雪に乳合子かへてア、難儀じやあるのふ、ごこそ後生氣な所を頼んで泊てもらはしやれエ、見れば見る程頃合なえい女房獨り寝さすは残念なれど此方も寒氣にござられ瘦畑の鬼灯であつたらものを見遁するごつぶやき歸るも頼みなき人の詞もせめての頼み火影を力戸口に這寄り幼い者をつれた順禮をござります、お情に今宵一夜さお庭の端にさばかりにて瘡にくるしむ息切の聲に主は涙もろくチ、いさしや瘡持

そふな、門中に癢てはたまるまい泊てしんじよご立て行くなむ三寶ご福引き留めア、是は又御庵相千萬此お觸のきびしい中殊にお役柄の此内ごこの者やら知もせぬに、めつたに引入後の難はごふなさるゝ、急度よしになされませ、夜中に一人歩行女ろくな者じやござりませぬ戸を明けずさばい逝したごよござります、いか様のふ親仁殿の留守の中は用心が肝心コレ、旅人いさしけれご一人旅を泊るは御法度御城下の中は軒下に寝る事はならぬ程に宿はづれの森の中へ往て癢やしやれさ和らかに言て引出す糸車こいごいふたごて行かれる道か道は四十五里波の上、ハアごこへ行ても一人旅は泊てくれふ様もなし、はるくの海山も弟夫に

廻り合い同じ道に思ふにつけ此子の顔も旦那殿に見せたいと思ふ精力で産落すから此巳之助漸々思も明くや明かす國を立てついに一夜さ家の下で寝た事がなけりや、身はならはしと山寺の鐘がなれば寝る事にして星の光りをさもし火さ思ふて寝入ご今夜のくらさ氷の様な此肌で寝ぐるしいは道理じやはいの、殊更瘡で乳はいらす雪にこゝへ雨にうたるもつらさは骨にこたゆれ共旦那殿や弟が敵を尋る辛抱はまだ、モコんな事ではあるまいに其艱難にくらべては雪はおるも刃の上にも寝るのむせめて女房の役氣は張詰ても此瘡の重るに付ては二人の身につかれの病も起りせぬか、萬一悲しい便やなご聞たら私しや何させふぞ、いの

ふ頼み上るは觀世音弟夫の武運長
 久我子の命息災延命、未練な事じや
 が私も此子を、夫に渡すまでは生き
 て居たい、ア、死にさもないはいな
 く、さ傍に夫の有るぞ共しらぬ不便
 さくひしげる喉に熱湯内外に水火の
 責苦雲寒子を濡さじと抱きしめく
 天道哀れ白雪の積り重なる旅勞れ瘡
 と寒氣にまぢられて、アット一聲氣
 を失ひどうぞ倒れし物音は肝にこた
 へてなむ、あみだ南無阿彌陀佛も口
 の内今のは何ぞご主の母戸を引き明
 ればつたりと身は濡鷲の目はごみ
 たり、こりや眩暈がきたのじやはい
 のエ、いぢらしやコリヤマアごふせ
 ふぞいのふく、チ、夫よ幸ひ此氣付
 こ、ごつかは文庫に用意の藥ア、申
 しそりや御無用になされませ、なせ

にいの、こりや親仁殿の道中で持し
 やつた結構な氣付けサア其結構な氣
 付を非人同然の者に吞ましてそれで
 も氣の付ぬ時ばかり合になりませ
 ぞへ此儘にしてほり出してお仕廻な
 されませ、じやさいふてごみ見捨に
 なる物ぞいのふ、アレ可愛や乳をさ
 がして泣はいの、せめて此子を殺さ
 ぬやうに奥の炬燵であたりめてやり
 ませふ、風に當じと寢巻の襦袢あか
 の他人は慈悲深く比翼さかはず女房
 をむごふ引出し戸を引込奥口見廻し
 さし足し勝手は見置く釜の前付木の
 明り見詰めて人は何さか言葉をつ
 こ隠して門の口ふしたる妻に氣を付
 る柴の焚火のあたまり、囁しめる
 齒を押し割て雪に潤す氣付の一滴耳
 に口寄聲かすめお谷さいふも憚つて

心の中で呼び生ける夫の誠通じてや
 うんさ一聲氣が付たか、コリヤく
 女房ハア、ヤアく、政右衛門殿コリ
 ヤ何にもいふな敵の有家手ばかりに
 取付たぞ此家の内へ身共が本名けぶ
 らいでも知らされぬ大事の所そちが
 居ては大望の妨げ苦しく共こたへて
 一丁南の辻堂まで這ふてなりさも行
 てくれい、吉左右を知らすまで、氣
 をしつかりと張詰めてコリヤ必ず死
 るなサア早ふ行けく、ご、夫の詞は
 千人力、觀音様のお引合せおまへに
 逢たは人參熊膽エ、悉いく、うぼ
 んはごこへチ、氣づかひすな坊主は
 奥へ寢さして置いたソレく、向ふへ
 来る提灯見付られな早ふく、せせり
 立れご此年月の悲しきと嬉しきとこ
 ふじて足立たす杖を力に立兼る、ご

やせんかたへに脱捨し菰に積りし雪の儘着せて人目をくらき夜をほかへ戻る達者親仁チ、お歸りなされましたかチ、チ、庄太郎寒いに門に何して居るイヤお歸りが遅い故お迎ひに出かける所ナンノ迎ひには及ばぬこりや門口に柴のものへさし非人共が業で有る不用心な見廻す提灯イヤ私かこ取拍子わざとばつたりコリヤ産相だんないくきつい風ですでに道で取れふとしたまでもいいで火が消たさいふもこたへる疵持つ足、天氣も大がた上り口庭から足ふく下駄直す師匠思ひに機嫌顔イヤなじみ程結構なものはない是から緩りま夜ご俱に咄そふかいよく最前頼んだ事違變はないのははお師匠共覺へぬくごいお尋れ心元なふ思召なら

なまくらでない魂を只今金打アコレ何のそれには及ばぬイヤ及ばぬさおつしやつてもお頼みなさるゝ本人の股五郎殿の有家御存じないさおつしやるはお師匠の詞に翰があるかま存じられ頼まれるに力がないナント左様じやござりませぬか探る心の奥より女房稚子抱き走り出コレ親仁殿最前行倒れの順禮も抱て居た此乳呑子今肌を明て見れば守の中にこの書付け和洲郡山唐木政右衛門子巳之助と書てあるわいのヤア幸兵衛立寄て誠にくシヤアよい物が手に入たぞ敵の伴を人質に取て置けは此方に六分つよみ敵に八分の弱味あり股五郎殿の運の強さ其がき随分大事にかけ乳母を取て育てるが計略の奥の手さ悦び勇めば政右衛門

すつこ寄て稚子引よせ喉ぶへ貫く小柄の切先幸兵衛驚きコリヤ庄太郎だ事の人質なせ殺したハ、此伴を留置き敵の鋒先きをくじらふと思召先生の御思案お年のかげんか、こりやちと擦が戻りましたわい。武士と武士との曠業に人質取て勝負する卑怯者さ後々まで人の嘲笑ひ草少分なむら股五郎殿のお力になる此庄太郎人質を便りには仕らぬ目さす相人政右衛門みやらいふやつ其かたわれの此小作血祭りに刺殺したお頼まれた拙者が金打と死骸を庭へ投捨たり幸兵衛手を打ちハ、ア尤其丈夫な魂を見届たれば何をか隠そふ股五郎は奥へきて居るはいの、げん五郎殿を起しておじや、コレく股五郎の片腕になる頼もしい人か来たと言

ふて爰へ呼んでおじやスリヤ澤井股五郎殿
 は此内に居さつしやるか、フウシテ外に
 連の衆でもござるか、イヤ、供もなし
 たつた一人奥底なふ咄してたも、打明語
 るは思ふ靈、何條しれたる股五郎手取りに
 するは安かりなんさ手ぐすね引て待つ、大
 膽、志津馬は女房が案内に股五郎が片腕さ
 は何やつなる共只一討と鯉口くつるげ居合
 腕、氣配り目くばり、互にきつこアこな
 たば、こ一度の仰天幸兵衛むんずと居直
 り唐木政右衛門和田志津馬ふしぎの對面満
 足であるふなと、先かけられし二人より思
 ひかけなき女房が心ごきまぎ不審顔ナント
 老人の目利よもや違ひはせまいかの、今宵
 澤井股五郎と名乗來る年ばい格好、聞き及
 びしとば挨拶の相違扱は返つて付けねらふ
 志津馬か、但し餘類の者か、肌赦させて詮
 議せんさ、わざと一杯くふた顔、三寸短板

見ぬいたれば我弟子の庄太郎が政右衛門さ
 いふ事を知つたは漸々たつた今、骨柄とい
 ひ手練といひ通れ股五郎が片腕にせんもの
 と頼めば早速承知仕なから股五郎が有家を
 根を押して聞きたるは心得ずと思ひしが子
 を一抉りに刺殺し、立派に言放した目の内
 に一滴浮む涙の色は隠しても隠されぬ肉身
 の恩愛に始めてそれと、悟りしぞよ、澤井
 にさせる恩はなけれど娘お袖を城五郎方へ
 奉公にやつた時、筋目ある人の娘、末々は
 我が一家の股五郎と聚合せん、チ、いかにも
 お頼み申すまつい言ふた一言が今更引かれ
 ぬ因果の縁其後娘は奉公引て歸りしかど、
 今落日になつた股五郎、見放されぬ侍
 の義理、かくまふ幸兵衛ねらふは我弟子悪
 人に組してくれと頼むに引かれず現在我子
 を一思ひに殺したは劍術無双の政右衛門手
 ほごきの此師匠への言譯イヤモ去り逆は過

御贈答に芳はしき

げやみ樂文

- お か ね
- あ め
- 美音あめ
- 栗おこし
- 文樂豆
- 菓子一式
- 昆布

東京銀座
 菊酒舎 富貴寄 罐入
 同店製名菓色々

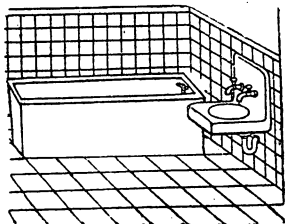
海産珍味、つき出し類
 洋酒一式

文樂座前
文樂堂

分なぞや其志に感じ入敵の肩持つ片意地も最早や是切り只の百姓町人も侍も、かはらぬ物は子のかはいさ、こなたは男のあきらめもある、最前ちらりと思ひ合はず順禮の母親の心も察しやらるゝと、悔めば門にたへ乗れてわつこ泣聲内よりも明げる戸直に轉び入、あへ亡骸をいだき上げコレ巴之助ものいふてたも、かゝじやはいのく夕へ迄も今朝までもういつらい其中にもてうちしたり藝づくし爺御によふ似た顔見せて自慢せふと楽しんだもの逢と其儘差殺すむごたらしいと様を恨るにも恨まれぬ、前生にどんな罪をして侍の子には生れしぞこんな事ならさつきの時母が死だら憂き目は見まい、佛のお慈悲のあるならば今一度生返り乳房をすふてくれよかしこ庭に轉びつ這まはり、抱きしめたる我が身も雪こきゆへき風情なり、志津馬涙を押拭ひ此上

は包まんやうなし、さてもの事に眞實の敵の有所を何びさて、此方も隠しはせぬ、有様は此幸兵衛最前庄屋へ呼ばれた時、股五郎にあふて来たはい、ヤアすりや敵は庄やの方に心得たりとかけ出すを、政右衛門引さゝめ愚く我々爰に有と聞き暫時も此地に足を留めふやふむない、早五六里も行過ぎて、もふ爰らに敵は居ぬ、此行先も用心して、海道筋へはよも行まい、道をかへて落たさ見へる親仁様、何ぞ左様でござらふがや、シタリ黒星其通り逆も非道の股五郎天道の御罰にて、ごふで討るゝ者なれ共此岡崎で勝負さすれば肩持ればならぬ幸兵衛薬師堂の山越に中仙道へ落したは城五郎へ一旦の情、股五郎この縁もこれまで思はぬ方便も縁になり、志津馬殿と言かけした娘が身の果不便や、見れば籬の小かけより思ひ切髪墨そめのけさにかはりしそぎ尼姿

化粧多イ
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

電話新町一六六九
二二七六

阪急 夙川

岡部商會支店

電話西宮一九七六

お袖かチ、出かしたつた、悪人の股五郎に
 假にも女房ご名の付た其間違かそなたの不
 運、可愛や盛り黒髪を、ア、コレ申しも
 ふ何にも申しませぬ顔は見え共許嫁の男持
 のがうるさくに屋敷を戻つた其時から、厄
 になる氣で袈裟衣、けふ一日に氣が替り染
 違ふたる鐵漿付けを元の白齒墨染に、染
 直してもばむしても思ひ初た煩惱の、心む
 ばげぬ佛様御ゆるされてご身を背け泣ぬ氣
 を泣く親心、股五郎にも志津馬にも縁を放
 れたお袖道心、袖ふり合ふも他生の縁、子
 に別れた順禮に菩提の爲のよい道づれ、關
 役人の我娘關所くも切手いらす仲仙道へ
 の案内者勝手につれて行れよと、娘に敵の
 道引きを遠子故に踏迷ふ未來の契り鉦撞木
 涙で渡す父母のめぐみも深き觀世音、南無
 阿彌陀佛なむあみだ我子は冥途の道しるべ
 志津馬唐木も馳合て、しほれぬ表武士の禮

師弟は内證敵同士、此儘かへるは卑怯者
 かへせご一聲切つくる、得たりご請る半蓋
 に馬士の胸切、重れ切眞この通りの手柄を
 待つ、まだお手の内は狂ひませぬハ、ハ、
 頓て吉左右くご笑ふて祝ふ出立は侍
 なりけり。

は用御の話電お
 南
 5番・701番・711番
 (長)132番・5291番
 西630番



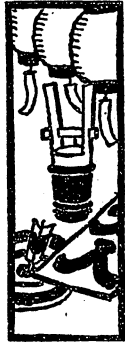
のまさなみ
 理料泉温一南

橋 ツ 四

づまは 會宴御

いのじ感・いる明

理料泉温一南



切 桂川連理柵

道行の段

桂川道行の段

おはん 竹本南部太夫
長右衛門 竹本小春太夫

ツ 竹本浪花太夫
竹本喜久太夫
竹本隅榮太夫
竹本文字榮太夫
竹本佐久太夫
野澤吉彌
竹澤圓六
鶴澤友友平造

この淨瑠璃のお半長右衛門の件は若竹笛駒淺田一鳥等の『曾根崎模様』に仕組まれた宮園節にも『麿の桂川』とあり歌舞伎にも度々上演せられたお半長右衛門が桂川心中の道行のまゝころであります。

(床本) おはん 道行の段 長右衛門

しらたまかなにぞさ人のまがめなばつゆさこたゑてきへなまじものを思ひのこひごろもそれは昔のあくた川これは桂の川水に浮名をなますうたかたのあはさきへ行しなのやのおはんをせなに長右衛門あふせそぐはぬ

あだまくらむすぶ帯やの軒もはやこよひかぎりには月かげのながれてつれてゆく身には妻にも名残おしこうぢあはればあさにさほさがる町をはなれてやう／＼させなをわろしてさり／＼にすがたつくらふ心根はまた娘氣の後や先にしにゆく身はつれよりも心ほそみち犬のこゑアレみぶでらの鐘のかすこゝのつこゝにきたみなみさうじのさうやしゆしやかの火かげかすかに三すじま身にしむ風にささばれてコレおはんこゝが三條あたご道つゆの命のおき所くさばのうゑさ思へ共みち／＼もいふ通りおれこそ死ねばならぬ身の上四十近い身をもつて十四やそらのこむすめさ一所に死だらぎり知らずせ世げんの人の笑ひのたねおやこのうらみお

鶴 鶴 竹
 澤 澤 澤
 友 友 友
 衛 衛 衛
 三 太二
 若 郎 郎 郎

人形

信濃屋お半 桐竹紋十郎

帶屋長右衛門 桐竹政 龜

きぬがおもはくさにかくそなたはな
 がらゑてなき我があさをさふてたも
 たのむさ斗りいひ残すそで涙のに
 はたすみおはん涙のつゆちり程もお
 まへのむりじぢやあるまぬけれど私
 しいやいなそんなそのようになごう
 よくなさしもぬかぬではづかしいこ
 のはら帯はごふしやうへまごの先
 へながらへて身二つなりだいたんな
 いたづらものじやあくしやうなぶし
 んぢうなさ人さんのわらはんしても
 だいじないかさりや可愛のじやない
 にくいのじやちいさい時からお前を
 まはしぎをんまありやきたのさん物
 見けんぶつあさおふて手をひかれた
 りおはれたりはだか人形を無理云ふ
 て買ふて貰たかんざしのすかしたら
 してあまやかしか愛がられた親達よ

りひさが尋ねりや長さんがたんさい
 さしさいふた時やんがてめうさにな
 らんしよま乳母や丁稚になぶられて
 はづかしかつたした心さだまり事さ
 あきらめていつしよに死で下さんせ
 恋を立ちくりんふのきづないだき
 つくく顔と顔男もまごふ涙のふち
 共にしづまんこなたへま手に手を取
 りの聲つけてもはや桂につきのあし
 アレくうしろに火の光り見さかめ
 られぬそのうちにいざや最後さ諸共
 に石をたもまに糸を針しゆすのおび
 やさしなのやの娘くま呼ぶ聲に見
 付られじ足早にこけつまるびつうし
 がせのみながみへまぞいそぎ行く。

四ツ橋
りよ

十月の文樂座
消息日誌

△十月三日

十月興行の初日開場

三都合同新聞株式會社創立披露宴も開か
れました。即ち大阪時事新報社、神戸新聞
社、京都日日新聞社と打つて一丸とした
右記新會社が京阪神の知名の士を迎へて
の御挨拶でした。當日大阪を代表して知
事、市長の代理、師團の方は後宮參謀長
京都は佐上知事北海道榮轉の際さて代理
神戸は兵庫縣知事を始め京阪神財界の名
士連を網羅してゐました。

△十月四日

人形淨瑠璃を非常に御愛好の大竹警察部
長が日曜を利用して御家族連にて御來座

満悦の体でありました。

△同日

世界的提琴家ハイフエツツ氏夫妻が朝日
會館の出演時間を割いて訪問されました

△十月六日

花木本店の観劇會が開催されました。

△十月十日

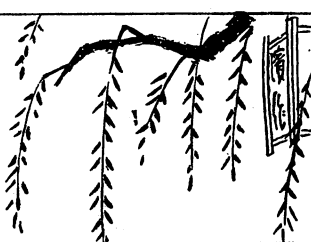
大阪吳服商同盟大會の秋期觀劇會が催さ
れ四百餘名の方々が秋の一日を愉快にす
ごしました。

△同日

來朝せる佛蘭西の若き作家で美術と演劇
の研究者アンドレ・マロー氏夫妻が知人
の近藤浩一路畫伯の案内で日佛協會を通
じて來座實盛物語と、津大夫の三人上戸
を見聞して非常に感嘆せられました。氏
は感想の一端を左の通り洩らされました
『詩人大使で日本通のクローデル氏の詩
にあるところが隨所に見られて非常に感

即席御料理
電話新町臺九番

新町
濱作



與を覺えた。

△十月十七日

阿部師團長閣下か令夫人御同伴で御來觀せられました。

△十月二十日

玉造中央婦人會の幹事招待會が開かれ秋の一日を郷土藝術に親しまれました。

△同日

十月興行も皆様の御支持ごあつき御聲援によつて好評裡に打上げました。

追記

土佐太夫、大隅太夫の一行は左の通り新築以來初の西日本巡回興行に進出しました。

十月一日より十八日までの間を

- 博多 大博劇場
- 久留米 惠美須座
- 広島 壽座
- 松山 國技座

徳島 稻荷座

狂言は

- 第一回 引窓、揚屋、寺子屋、酒屋、十種香
- 第二回 本下、紙治、尼ヶ崎、堀川、重

- 第三回 辨慶上使、帶屋、合邦、先代御殿、阿古屋

- 主なる太夫、三味線は
- 土佐(吉兵衛) 大隅(道八) 相生(清二郎)
- 南部(廣助) 鏡 小春(團六) 吉左等

- 人形は
- 紋十郎、扇太郎、玉幸、紋太郎、小兵吉等。

茶



大改池橋
 茶
 番三三六二町新証宛

文樂座使用料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)	夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
文樂座	約 850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓

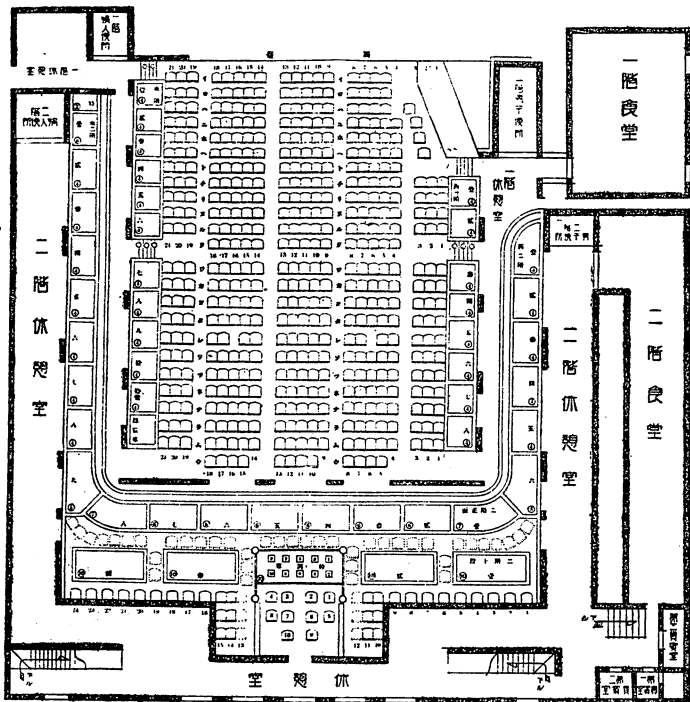
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器 具 備 考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスボット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スボット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスボット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衛 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラガエータ使用料		無料

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になって居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。
 前賣切符壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も壹等席に限り御豫約
 申し上げますから上圖の座席
 表に依つてお早く御望みの御
 座席をお申し込みになればお
 心のまゝにお好きな處が御自
 由にされます御用命の節お呼
 出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます
 切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります。
 二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。
 尙多人數様お団体様のお申込
 も御相談いたします。

文樂座

使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前アモ御使用中アモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセマ
- 但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出テラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座が必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用ア必ず其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
- 六、御使用者ノ御希望ア當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用ア特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
- 既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセマ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

◇ 文樂座御ひるき名簿募集 ◇

- 一、申込は必ず官製はがきの事。
- 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい
(御住所御芳名の他一切不要)
- 一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。
- 一、會費其他一切申受けません。
- 一、宛名は大阪市南區四ツ橋 文樂座編輯部宛の事。

フランス語に譯された

『文樂人形芝居の研究』 一部特價 金一圓八十錢

宮嶋綱男氏著 寫真版數十個挿入

人形番附と文樂座發達の歴史が全部判る唯一の文獻

『文樂今昔譚』 一部特價 金二圓

木谷蓬吟氏著

美しいグラフと興味溢る、好讀物月刊雜誌の

『道頓堀』 一部 金三十錢

御休憩は

バルコニー
露臺遊歩場を御利用下さい。

食堂二階より御自由にお昇り下さいまし。

蒸しタオルの設備も御座ぬます

一階西側の大休憩所に御座います
ごなた様でも御自由におつかい下さい。高雅な香りの資生堂ローションを使用してゐます。

お土産に

お知合への通信用に

文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある

齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行 三枚一組美麗なる包裝

一部 金五十錢

額面用のものも

三部一組別包裝

毎月發行

一部 金壹圓

圓

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一審前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗は

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は

充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お席は

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人は

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶対にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

出演者は

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

當座御使用の間は

一階西側に給茶處と大休憩所を新設しましたから御使用下さい。

四ツ橋 文樂座

前賣切符専用電話南四七二一番
電話南 七四〇八番
三七八八番

昭和六年十月卅日印刷
昭和六年十一月一日發行

大坂・四ツ橋・文樂座
編輯兼
發行人 大塚 頁三

大阪市西區土佐通二丁目
印刷者 永井太三郎

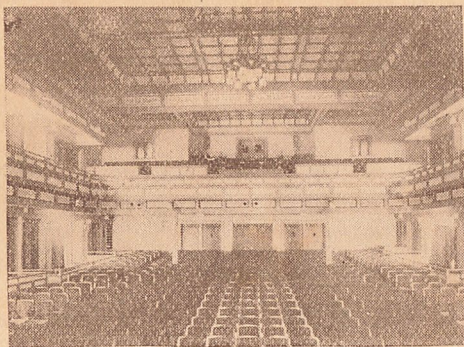
大阪市西區土佐通二丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

經濟的な

大阪の宴會劇場

「文樂座の御宴會」を

御利用下さい。



金四圓五拾錢 (御一人様)

御座席は……一等指定椅子席
お食事は……皆様本位の定食
お寫眞は……お揃ひの記念撮影
番 附……床本と總配役付

お申込は 二十人様以上を承ります。

お寫眞は 終演と同時に所持歸り出来る様速成いたします。

お申込は お座席其他の準備の都合上五日前にお願ひ致します

お申込は 文樂座事務室へお願致します。

お電話は 南四七一・三七八八・七四〇八番

アレ止めに一番よい

クラブ 美身クリーム

若き日の美しく
しさを永遠に
保つことが確
かに出来ます

クラブ 白粉

艶麗に
清楚に

